社会人が送る
二度目の学生生活
TrymenT
脚色 えある
原作 TrymenT
III
TrymenT

TrymenT

今を変えたいと願うあなたへ

YoU KnowS ThE DeaR KnowS

III

TrymenT CharacteR RolL

登場人物名簿

夏杞 文実（なつき ふみ）

河居 織鶴（かわい おりつる）

星乃 あやめ（ほしの）

喜羽 正明（きば まさあき）

君島 翔（きみしま かける）

TrymenT CharacteR RolL

箒木日向子（ははきぎ ひなこ）

八馬　奏（はちま かなで）

ミリャ

新田　司（にった つかさ）

海蔵もも（かいぞう）

佐藤理人（さとう りひと）

TrymenT CharacteR RolL

トト

大舘流花（おおたて るか）

ユウ

五十嵐啓介（いがらし けいすけ）

アイ

中村夏奈（なかむら かな）

TrymenT CharacteR RolL

伊砂（いすか）　真（まこと）

三国（みくに）　義貴（よしたか）

OnE SideD LovE

――六月。
寮のリビングに、木漏れ日が差し込んでいる。
新緑の季節。風に吹かれた葉がひらひらと落ち、道の端に生い茂った草の上を小さな虫が歩いていた。
夏を予感させる気温の中、リビングのテーブルを織鶴と文実、喜羽が囲んでいる。
文実の横にあいているスペースには、あやめが車椅子のまま座っていた。
「ああ〜。そっけないいんだよお〜奏くんがあ」
文実が声を上げ、三人が文実の顔を見る。
「何をぼーっとしてんのかと思えば。まーたそれかい」
片肘をついた織鶴が呆れたように言った。
あやめは手元のタブレットを操作しながら苦笑いを浮かべた。
文実が織鶴を睨む。
「嫌ならスルーすればいいじゃん。聞き流してよ」
「聞いてほしいくせにー」

織鶴の冷めた態度に、文実はあやめのほうに顔を向ける。
「あやめー」
文実が手をのばして、あやめの手元のタブレット画面に触れる。
あやめが顔を上げて、文実を見た。
「うーん。八馬さんとは最近どんな感じなの？」
「なんにもない、なんにも。授業終わるとすぐどっかいっちゃう」
「まあ、最初からずっとそんな感じだったよね」
「……こんなにアタックしてるのに。奏くん絶対気付いてるはずなのに」
泣き顔の文実に対し、織鶴がその左手首を、中指と薬指で押さえる。
「つまり脈なし!!」
「……」
文実が目を座らせて織鶴を睨む。
「てか、左薬指の指輪のことは八馬さんに聞いたの？」
「……聞いてないケド」
「だめじゃん」
「……ちっ」
「あー舌打ちした！」

「ねー喜羽、また手伝ってよ」
「みんな！　この子いま、舌打ちしたよ!?　ねぇ、聞いてた!?」
文実を指さして叫ぶ織鶴を無視して、文実は椅子を喜羽のほうに寄せる。
喜羽は話題には入らずに、手元のノートと、その隣のタブレットの間を行き来していた。
文実がテーブルをパタパタと叩く。
「ねー、喜羽ー」
「嫌だよ。協力してやってもお前、奏の前じゃへタレになるじゃないか」
手元から視線をそらさずに喜羽が言う。
「女の子はそういうほうがかわいいからいいの」
「そういうの、奏は嫌いなんじゃないか？」
文実が固まる。
「き、嫌いっていってた？」
「いや、知らん。でも夏杞はいい奴だとは言っていた」
「でへへへへ」
文実が両手で、自分の頬をむにむにといじる。
「チョロイン」
「そこらそこらお前

そもそもお前」
　ここにきてようやく、喜羽がペンを止めて顔を上げた。
　ペン軸で文実の顔を指して、まっとうに告げる。
「ただでさえもうグループ活動ほとんどないのに、なんで選択授業、奏と別の選んだんだよ」
「……だって、恋愛には自分の将来があってこそだし」
「文実が真面目だ……」
「将来は大事だな。感心した。夏杞はそのままでいい」
「このままじゃだめなんだよおーーー。てか、そういう喜羽はいいのかよ」
「なにが」
「翔先輩だよ」
　喜羽の動きが止まる。
　文実に視線を向けたまま、喜羽は手元のタブレットを操作した。
「……………」
　その隣では、あやめが呆然と喜羽を眺めていた。
「気になるんでしょ、翔先輩」
「東京、大阪及び東京、名古屋がそれぞれ独立した通信回線で接続されている。東京、大阪の稼働率は０・９、東京、名古屋の稼働率は０・８である。東京、大阪の稼働率を０・９５以上に改善するため

に、大阪、名古屋にバックアップ回線を新設することを計画している。新設される回線の稼働率は最低限いくら必要か」
「おい、逃げんな」
「符号加速度が192kビット秒の音声データ2・4Mバイトを、通信速度が128kビット秒のネットワークを用いてダウンロードをしながら途切れることなく再生するためには、再生開始前のデータのバッファリング時間として最低何秒間が必要か」
「50秒」
抑揚のない声で文実が即答する。
喜羽がタブレットの画面を指でスライドさせる。
「ほう、正解だ。感心した」
「利害は一致してる訳じゃん。翔先輩も奏くんも自由学習なわけだし、状況は同じわけだ」
「べつに、俺は君島とは普通に会えるし」
「女子攻略には女の子の助っ人は強いぞー」
「星乃に頼し」
その言葉に、あやめが目を細めて喜羽を睨む。
「私、協力しないから……」
「むう」
「

はうー。喜羽、うぃんうぃんていこーよ」
両手で作ったピースサインをはさみのように動かしながら文実が言った。
「うぃんうぃんってなんだ？」
喜羽がそれを真顔で見つめる。

翌日、放課後。図書館の中庭に面したテーブルに、あやめは車椅子をつけていた。
あやめの姿を見つけた喜羽が手をあげて歩みよる。
……珍しい組み合わせの待ち合わせ。
原因は昨日の雑談の終わり際、喜羽があやめに相談した内容による。
――6月21日、君島の誕生日だろ。だから……。一緒にプレゼント買いに行こう。
その内容には、さすがのあやめも断る理由はない。買うものは決まっているか、との問いかけには「決まっていない」と返されて、あやめは苦笑いをしながらその誘いを承諾したのだった。
「どうして図書館なんだ？」

「放課後二人で教室でていったら、違和感すごいでしょ」
「今更じゃないか？　俺と星乃はよく一緒に居るし」
あやめの頬が少しだけ赤くなる。
呆れた風な態度を出して、あやめが溜息を吐いた。
「はあ、サプライズなんだからバレたら意味ないでしょ」
「たしかに」
「……ほんと、バカ」
「悪かったな……」
「……はあ」
溜息の重なるあやめの車椅子を押しながら、図書館を出発し、ヤシの木が並ぶ歩道を喜羽がゆっくり歩いていく。
道に人気はなく、車通りも少ない。
喜羽の足音と、車椅子のタイヤが砂利を踏む音が続く。
「そういえば、星乃はなんで資格試験のほうを選んだんだ？」
「ん、そりゃ、資格をとりたいからだよ」
「お前、デザインとかウェブ勉強してたじゃないか。それなら自由学習じゃないのか？」
「一応デザインやウェブにも資格はあるよ」
「なんだ、そうなのか」
「[illegible]

「それに加えて、他の資格もとっておきたいなって。将来選べる道、おおいほうがいいから」
「まあ、無駄になることはないだろうからな」
あやめは、視線を手元の地図に落とす。
「ここを左かな」
「おう」
車椅子を押しながら喜羽が左に曲がる。
「これ、どこに向かってるんだ？」
「來夢学園提携の文房具屋」
「文房具屋？　どうして？」
「翔、漫画……」
言いかけて、あやめが口をつぐんだ。
「漫画？」
「……翔が使ってるシャーペン、だいぶ年季が入ってるから。頭のカバーと中の消しゴムもなくなってたし、それがいいかなって」
「漫画って？」
「なんでもない、気にしないで」
あやめが前を向いたまま言った。
しばらくあやめを見下ろしてから、喜羽も前を向く。
「ふむ。なるほどな、シャーペンか」

「翔、貧乏性なのか、持ってるもの全部長々と使ってるぽいんだよね」
「確かに、そういうイメージだな。しかしそれだと、俺はどうすればいい」
「私はもう折り畳み式の鏡を買ってあるから。シャーペンは喜羽くんのプレゼント案」
「む、そうなのか。なんだか付き合わせて悪いな……」
あやめが振り向いて、喜羽を見上げる。
にやりと、イタズラっぽく笑って口を開いた。
「なんか奢って」
「わかった」
「もう、冗談だよ」
喜羽らしい真面目すぎる即答に、あやめは小さく吹き出したのだった。
……もちろん、「冗談」を真に受けるのが喜羽という男だった。
プレゼントを買い終わった、その帰り道。学園近くにある喫茶店

に、喜羽は足を向けた。あやめとひと悶着あったものの、車椅子を押されているあやめに断り切れるはずもなく、二人はそのまま店の中へ。テーブル席の奥側に喜羽が座り、その正面にあやめが車椅子をつける。

　四角いテーブルを挟んで二人が向かい合う形。あやめが周囲を見渡してから、すこし俯いた。

「なんか、恥ずかしい」

「どうして」

「学園の人に見られてたらはずいじゃん」

　喜羽が首をかしげる。

「車椅子だからか？」

　あやめが目を細めて、喜羽を睨む。

「……そうじゃない」

　小さくため息をついてから、あやめがコップを手に取る。

「あーあ、なんか、本当バカらしい……」

「俺はエアーリーディングが苦手なんだよ」

「知ってるよ」

　喜羽が手をのばして、テーブルのメニューを開いた。

「まあ、ここは今日のお礼として奢るから、好きなもの選んでくれよ」

「なんか、悪いなあ」
「俺はもう決まってるからゆっくり選んでくれ」
「チョコバナナパフェ？」
「うむ」
「いつもそれだよね」
　あやめは視線をメニューに戻して、チョコバナナパフェの値段を確認した。
　それなりの値段だが、高いというほどでもない。
「じゃあ、私もそれにしようかな」
「うむ、わかった」
　オーダーを通し、ほどなくして二つのチョコバナナパフェがテーブルに運ばれてくる。
　喜羽は上から豪快に崩して、生クリームとチョコレートソースとアイスクリームを混ぜ合わせた。
　あやめは、自分のパフェからアイスとバナナをすくって口に運ぶ。
「んー、あまーい」
　はにかみながらあやめが言った。
　喜羽がその様子をじっと見つめる。
「ん、なに？」
「いっ

「いや」
喜羽は視線を崩れたパフェに戻して、スプーンで口に運んだ。
「そういえば」
「ん？」
二口目を頬張ったあやめが喜羽を見る。
「夏杞に相談されていたウィンウィン計画なんだが」
「うん」
「なんかいい案ないか？」
パフェの中身をスプーンですくったまま、あやめが手を止める。
視線を落として、スプーンにのったアイスクリームを眺めた。
「……まあ、要はきっかけを作ればいいんじゃないかな」
「ほう。きっかけ」
あやめが頷いて、スプーンを口に入れた。
「……というと？」
「うーん、例えば」
パフェを咀嚼しながら、あやめが視線を上に向ける。
「お祭りとか遊園地とかにみんなで遊びに行けたりすればさ、それもきっかけになると思うんだけど……この島にはないもんね」
「そうだな」
「だったら、なにか二人組にグループ分けできる案があればいいわけ

で……」
　そう言いながら、あやめは島のパンフレットとタブレットを鞄から取り出した。
　タブレットを操作し、『御雲島についてのレポート』と表示された画面を喜羽に向ける。
「ん、懐かしいな、それ」
　あやめが呼び出した『御雲島についてのレポート』というのは、学園の課題で出されたうちのひとつだ。なかばオリエンテーションのような形で、生徒たちは各自この御雲島について調べ、班ごとにそれをレポートとしてまとめて発表せよ、と言われていた。これは、その全員分のまとめだ。
「これが役に立つわけですよ」
「ほう？」
　タブレットを自分の手元に戻して、あやめが画面をスライドさせていく。
「そうだ、喜羽くん」
「なんだ？」
「喜羽くんって、登山とか大丈夫なの？　えっと、ペースメーカー的な意味で」

「ん、ああ。そうだな……登山は結構きつい。技術が進化して、ある程度重いものを持ち上げたり、磁気関係の類による影響とかはほぼ問題なくなったんだがな……」
「そっか……じゃあ小夜湖はだめか……」
「小夜湖……。奏と夏杞の班が発表してた場所か」
「うん」
　あやめが再度、喜羽にタブレットを向ける。
　喜羽が差し出されたタブレットに顔を近づける。
「いや、このくらいの登山なら問題ないぞ。これ、ゴンドラもあるんだろ？」
「あるけど、大丈夫なの？」
「ああ。どちらかというと体力的問題だからな」
「そうなんだね」
　あやめは小さく、何度かうなずいた。
「小夜湖だったら、翔絶対写真撮りたがるだろうし、連れていくきっかけは作れると思う。私は山、登れないからね」
「……ふむ」
「それで、文実と八馬さんには月乃海岸に行ってもらうとか。みんなにとってもこの島のことを知るいい機会だし、小夜湖に登れない私は可吾さんと行動すればいい」

[illegible]

「なるほどな」

喜羽がうなずきながら言って、テーブルにおかれたパンフレットを手に取る。

「実は俺も、前から気になってた場所があるんだが」

島の地図のページを開き、指で東側へなぞっていく。

「……ここだ。温泉旅館葉月。週末、ここに一泊しにいけばいいんじゃないか？」

「あ、それいい」

「だろ？」

あやめも地図から顔を上げた。すぐ目の前に、喜羽の顔。

あやめの瞳に、喜羽の姿が大きく映る。

「……」

しばらくあやめは、喜羽を見つめていた。

前屈みになってテーブルに覆い被さっていた喜羽が顔をあげ、あやめの視線に気付いた。

「どうした？」

「えっ、ああ……」

咄嗟に下を向き、前髪を片手で弄る。

「ああ、うん。いいと思うよ。温泉旅館」

「よし、決まりだな。本当頼りになるな、星乃は」
「あはは……」
人差し指で前髪に触れながら、あやめが小さい声で笑った。
あやめは俯いたまま、溶けてしまったパフェの中身を見つめていた。
「……なにしてんだろ、私」

・
・
・

――週末。
温泉旅館葉月の正面玄関には、木造の広い空間がひろがっていた。
ロビーを彩る数々の調度品。一面ガラス張りの壁面には、青い海がよく見える。窓際には、グランドピアノまで置かれていた。
「八馬さん、ありがとうございます」
「いえいえ」
あやめと、その車椅子を押すのは八馬だ。
グランドピアノ近くのソファでは、織鶴と文実がチェックインが終わるのを待っている。

[illegible]の[illegible]待っている
　受付で係員と話しているのは、翔と喜羽だ。
　入り口付近に置かれていたパンフレットを手に取ったあやめが、受付の方へと目を移す。
「こちらが当館の見取り図で、バリアフリーのお部屋は二人部屋になっております。ですので、こちらの四人部屋と合わせてご利用頂くのがよいかと思います」
　係員が図面を指さしながら、翔と喜羽に説明をしている。
　二人は部屋の写真を交互に見比べていた。
「まあ、これがいいよね」
「そうだな」
「では、それでお願いします」
「かしこまりました」
　あやめはぼんやりと、翔と喜羽の後ろ姿を眺めていた。
　そこに、後ろから声がかかる。
　見れば、文実がガラス窓のほうを指さしていた。
「あやめ、外の景色きれいだよ」
「あ、うん」
「押しますね」
　車椅子がゆっくりと進んでいく。

あやめはパンフレットを脇に挟み、カメラのファインダーを覗き込んでいる織鶴のほうに視線をやった。
近くには、手招きしている文実の姿。
八馬に車椅子の操作を重ねて感謝した後、ガラスの端から端まで続く水平線をあやめが見つめる。
「すごい、こっち側は学園側の海岸と全然違うね」
「ねー、砂浜も真っ白だね」
「うん」
「おーい。部屋、借りられたからいくよーっ」
声がして振り向くと、翔が手をあげて手招きしていた。
「今、行きます」
ウィンウィンの第一歩。
一泊二日の温泉旅行は、こうして始まったのだった。

車椅子のハンドルを支えながら、翔が部屋の扉を開く。
「おお、普通に広いね」
玄関横の空間を翔がのぞきこむ。
バリアフリーならではの広い空間。そこから先は、トイレとお風呂

に繋がっていた。
奥の部屋に進むと二つのベッドと、その奥の一段高くなっているスペースが二人の視界に入る。
窓の外に視線を向けると、青空と海が水平線でわかれているのが見えた。
「翔、かわるね」
振り向いたあやめが、翔を見上げて言った。
翔が微笑み、ハンドルから手を離す。
「うん。荷物は畳のところにおいておくね」
「ありがと」
ハンドリムに手をかけて、あやめがベッド脇まで移動する。
すると部屋の扉が二度叩かれ、織鶴が部屋に入ってきた。
その後ろから文実が、少し間を開けて、喜羽と八馬も織鶴のあとに続く。
「おじゃましまーっ」
「いらっしゃーい。奥のスペースが結構広いから皆で使えそう」
「ほぉ！」
織鶴が奥へ歩いていき、靴を脱いで一段高くなったスペースにあがる。

そのまま窓際に近づき、景色を見渡した。
「寝る時以外はみんなここでよさそうですね」
「うんうん」
あやめが車椅子を進め、奥のスペースに上がる段差近くに寄せた。
ブレーキを掛けて、フレームに手をかけて、身体を持ち上げるよう力を込める。
その様子に、すぐに気が付いたのは八馬だった。
「手伝いますよ」
「あ、えっと」
あやめがこたえる前に八馬が動き、あやめの体を持ち上げた。
そのままかがみ込み、あやめを畳に腰掛けさせる。
「す、すみません」
「いえ。手すりがないと大変……」
言いかけて。
八馬の視線が、あやめのすぐ横にある手すりに注がれる。
「……すみません、ありましたね」
八馬が苦笑いを浮かべながら言い、あやめも苦笑いで返す。
「いえ、ありがとうございます」
何気ないやりとり。
その様子を、詩羽がじっと見つめていた。

その様子を、喜羽がじっと見つめていた。
「俺も持ち上げる方法、勉強しないとな」
「正明は、あの動作はやめておいた方がいい」
八馬の真面目な忠告。
喜羽は首をかしげたあと、納得したようにうなずいた。
「……あ、そうか」
自分の胸元に手を触れ、喜羽が言った。
男二人のやりとりを、今度はあやめがぼうっと眺める。
その隣では、文実が「あやめ、いいな―」なんて呟いていた。

翔とあやめの部屋に集まった全員が、段差で区切られた畳スペースに座った。
六人が囲んだテーブルの上に、開封された菓子袋や島のパンフレット、それぞれのタブレットが並ぶ。
「と、いうわけでだな、それぞれ夕方まで自由行動にしようと思う訳なんだが、どうだろうか」
タブレットを用いた、喜羽による渾身のプレゼンテーション。
けれども肝心の翔が腕を組んだまま、少し首をかしげる。

「うーん。話はわかったけど、それだったら私も旅館に残って、あやめやりっちゃんと温泉入りたいなあ」
「えー。でも翔、山のほうの写真はまだ撮ってないでしょ。温泉はあとでも入れるしさ」
「でも、あやめ、夜だともう入らないでしょ」
「え、うん」
「ほらー。あやめとお風呂に入るなんて機会、なかなかないだろうしー」
「いやいやいや、この季節の山の景色を撮れる機会のほうが貴重だよ。それに、そしたら喜羽くん一人になっちゃう」
絡み合うそれぞれの思惑。
ここで八馬が喜羽のほうに顔を向ける。
「三人で両方回るというのは？」
「いや、それは」
正論に対し、言葉に詰まる喜羽。
そんな喜羽を、文実がジッと睨む。喜羽でも分かるそんな視線に、、喜羽は喜羽らしく答えた。
「反対側だし、時間がかかるだろ。それに俺は君島と回りたいんだ」
あやめの体がぴくりと動く。
君島と文実が、口をあんぐりとあけて喜羽の顔を眺めた。

織鶴と文実が、口をあんぐりとあけて喜羽の顔を眺めた。
「へ？　なんで？」
もっとも意外そうなのは、当の本人。
当然の疑問に対し、喜羽が腕を組んで翔を見つめる。
「君島に、聞きたいことがあったんだ」
「ん、なあに？」
「漫画についてなんだが」
「うん、わかった。おうけい。二人でいこうか」
一撃必殺。
意図通りとはいかぬまでも、結果としてみれば「うぃんうぃん」だ。
そんな喜羽の様子に対し、八馬は喜羽と翔の顔を交互に見比べた。
「そう、わかったよ」
その言葉に、喜羽は黙ったまま深くうなずいたのだった。
織鶴が、畳におかれた鞄を漁る。
あやめはテーブルの上のタブレットを操作していた。
ちなみに文実はなんやかやと八馬を説得し、二人で出かけることに

成功していた。
　残された織鶴は鞄から取り出した衣服を小さなカゴに入れて、あやめのほうを振り向いた。
「それじゃあ、あやめちゃん。行きましょう」
　顔を上げたあやめが織鶴を見る。
「え？」
　あやめによく見えるように、織鶴が手に持ったカゴを掲げる。
「温泉ですよ、温泉」
「え、あれは、口裏合わせというか……」
「嫌いですか？　温泉」
「いや、そんなことはないけど……」
　俯いたあやめが、自分の足を見つめた。
　織鶴が微笑んで口を開く。
「じゃあ、行きましょう。そして帰ってきた先輩に自慢して、悔しそうな顔を拝むのです」
「ええ～、なにそれ」
　苦笑いを浮かべながらあやめが言った。
「うーん……」
　あやめの視線が窓の外の水平線に向けられた。

しばらくその景色を眺めてから、あやめが口を開く。
「それもいっか」
織鶴の表情がきらめいた。
「よっし！　じゃあ私、受付で鍵もらってくるので、準備お願いします」
「うん、わかった」

ガコンガコンと大きな音を立ててゴンドラが揺れる。
翔はカメラを片手に、窓にへばりついている。
対面に座る喜羽がその様子を微笑んで見つめていた。
「カメラ、落とすなよ」
「大丈夫大丈夫！」
シャッター音が途切れることなく鳴り続ける。
「あー、あやめにもこの景色見せたかったなあ」
「君島が撮った写真を見せてやればいい。きっと喜ぶ」
「うん、そうだね」
カメラを胸の前に落として、翔が喜羽のほうを振り返る。
「せっかくだから喜羽くんも一緒に」

「ん？」
「ほら、こっちこっち」
翔が腰掛けている位置をずらし、空いた空間をぽんぽんとてのひらで叩いた。
「あ、ああ」
喜羽はうなずいて立ち上がり、翔の隣に座った。
翔が少し喜羽のほうに寄り、腕を伸ばしてレンズを自分のほうに向ける。
二人がレンズを覗き込む。
翔が笑顔でピースを作り、喜羽もぎこちなく、ピースを向ける。
かしゃり、とシャッター音。
カメラの画面を確認してから、すぐにまたカメラを構える。
「今の練習ね。もうちょっと、こっちか……」
翔が腰をずらして、喜羽に寄る。
喜羽が視線だけで翔の動きを追う。
翔が喜羽を見上げた。
「喜羽くんも、もうちょいこっちに寄って」
「あ、ああ」
翔に言われるまま、喜羽も翔に身を寄せる。

肩をピタリとくっつけてから、翔がもう一度レンズに目を向ける。
「ん、撮るよ」
翔がピースを作り、喜羽もそれに続く。
隣の人物がいつも以上に不自然な態度なことなど露知らず、翔が次々とシャッターを切っていく――。

舗装されていない砂利道を、翔と喜羽が歩いていく。
翔がときどき立ち止まっては写真を撮り、そのたびに喜羽も歩を止める。その繰り返し。
「喜羽くん、ごめんね。写真撮ってばっかりで」
「いや、いい。俺もゆっくり景色を楽しめる」
翔が微笑み、喜羽の前を歩きだす。
「そういえばさ。聞きたいことあるって言ってたよね」
「ん？」
「旅館で」
「ああ……あれは、咄嗟にな……。まあでも、そうだな、せっかくだしな」
歩きながら首をかしげた翔が、喜羽を挑める。

「君島、星乃に『親愛なるあなたへ』を貸してやったんだろ」
翔が目を見開いて立ち止まる。
「へ⁉　あ、ええ、うん。貸したけど⁉」
「実は、そのおかげで星乃と仲良くなれた」
「ん？　そ、そうなの？」
「ああ」
くだり坂とのぼり坂に枝分かれする分岐点に、小夜湖と書かれた看板が立てられていた。
目的地である小夜湖は、下り坂方向。その通りに翔が進み、喜羽もあとに続く。
「俺もあの漫画が好きなんだが、星乃もすごく気に入ったみたいでな。君島の漫画のおかげで、会話が増えた」
「そ、そうだったんだ」
「星乃にどう接すればいいか、最初は少し悩んでいたからな。きっかけというのは大切だと、感じたよ」
「……………」
翔はすぐには言葉を返さずに、そのまましばらく歩いてから立ち止まる。
振り返り、尋ねた。

「喜羽くん」
「どうした？」
「今のところ不調とか、ないかな」
「不調？　なんでまた？」
「あやめから喜羽くんの体のこと、聞いたからさ」
「ん、ああ」
そういうことか、と左胸に手を当てながら喜羽が頷く。
「大丈夫だ。このくらいならなんともない。それよりも、虫が心配だな」
「ああ、虫、苦手なんだっけ」
「小さいのはまだマシなんだが、デカイのはヤバイ」
「なるほど。まあ、まだそんなに飛んでないよね」
「だといいんだがな」
そう言ってから、はは、と喜羽は空笑いをあげた。
「喜羽くんは、マラソンが好きなんだっけ」
歩き出した翔が聞いた。
喜羽も翔の半**歩**うしろを**歩**き始める。
「そうだな」
「嫌いになったこととかある？」
「ん……マラソンを？」

「そう」
思いがけない問いかけに、自分の顎をさすりながら、喜羽は顔を上に向けた。
「いや……ないな。マラソンは俺にとって趣味だからな。もっとうまく走りたいと思うことはあっても、嫌いになったことはない」
「……そっか」
「あぁ」
立ち止まった翔がしゃがみ込んで、カメラを構える。
喜羽も立ち止まり、翔がカメラを向けた先を見た。
青い羽根の小さな鳥が細い木の枝にとまっていた。
「君島は、何かが嫌になったのか？」
「うーん」
問いかけに、翔は喜羽へと振り返ることはせず。
「……そう、かもしれないね」
そのまま、ぱしゃりとシャッターを切った。
海岸を見下ろせる小高い崖に建てられた柵に、文実と八馬が歩み寄

る。
　文実が柵に手をつき、軽く身を預けてその光景を見下ろした。
「わー。さすがに人が結構いるね」
「そうですね」
「海岸側に海の家があるって、織鶴が言ってた。そこに行ってみよう」
「はい」
　頷きを返した八馬とともに、柵から離れて階段をおりていく。
　ほどなく砂浜に降りると、文実は足踏みして白い砂を踏みしめた。
「うわー砂だー」
　駆けだした文実が、砂浜に寄せる波に近づく。
「すごい、めっちゃ透き通ってるー。靴脱いじゃお。……砂あっつ。水冷たっ」
　はしゃぐ文実が、八馬の方を見る。
　すると八馬も、文実と同じように靴と靴下を脱ぎ始めた。
　その行動に、文実が少なからず目を丸くする。
「本当に、都心から離れた海はきれいですね」
「あーそうだねー……地元が栄えてる場所だったりすると、特に思っちゃうよね」
　八馬はうなずいてから、水平線に視線を移した。

文実は、八馬の横顔を横目で盗み見た。
波が何度か寄せて返し、二人の足元の砂が少しくぼんだ。
「…………」
しばらく八馬の横顔を眺めてから、文実も水平線に視線を向けた。
　そこからしばし海の感触に浸った後、二人は噂の海の家へ。
砂浜に設置されたテラス席に文実と八馬が座る。
椅子の側に靴をおき、文実は素足をプラプラと揺らした。
丸いテーブルには、注文したそれぞれのジュースが置かれている。
「そういえば、奏くんは生まれはどこなの？」
ジュースを飲みながら、文実が問いかける。答えは、少しだけ意外なものだった。
「生まれは広島ですが、育ちはほとんど大阪です」
「へええ！　じゃあ、本当は関西弁？」
「いえ、父に標準語で話すように育てられたのでほとんど話せません」
「そうなんだ。私、お兄ちゃんが関西圏で仕事してるからたまに関西弁出ちゃうんだよね。気を付けてはいるんだけど」
　文実の言葉に、そういうのありますよね、と八馬がうなずく。
「奏くんは、お父さんとは仲いいの？」

「父は、正確には養父でして、血の繋がった父や母についてはなにも知りません」
「え、そうなんだ」
「はい。養父も僕が十六の頃に亡くなり、今は養母だけです」
「……………」
触れにくい話題に触れてしまい、文実の視線が少し泳ぐ。
手持ち無沙汰にストローへ口をつけ、そのまま視線は八馬の左手、その指先へ。
「あ、あの。……前から聞きたかったんだけどさ」
「はい。なんでしょう」
「奏くんって、結婚してるの？」
「いえ。僕は独身ですよ」
文実は姿勢を正して、両手を下にギュッと握った。
「へ、ふぇ〜。そなんだ〜。あ、ちょっと顔がかゆい」
自分の頬を挟みこむようにしながら、文実が体をひねって後ろをむく。
にやけた顔をギュウギュウともみほぐし、きりっと真顔をつくり、また前を向く。
「それじゃ、どうして薬指に指輪をしてるの？」
「ああ」

[illegible]」

指摘に、八馬が左手を広げて見せる。

薬指には、相変わらず銀色の指輪がはめられていた。

「そう思いますよね。これは、父から魔除けの指輪だと頂きました」

「へ、へー！　魔除け！　すごい効果ありそー！」

八馬は文実に視線を向けてから微笑んだ。

「どうなんでしょうね」

「…………。あ、あの。もう一つ聞いていいかな」

「はい」

八馬に見つめられた文実がまた少し俯き、上目遣いで八馬を見つめた。

「奏くん、今日のお誘い……迷惑じゃなかった、かな？」

外に開けた浴場で、あやめと織鶴が並んで温泉に浸かっている。

横長の浴槽は、二人が足を伸ばして並んでもゆとりがある。

あやめの車椅子は浴槽のすぐそばに止められていた。

お湯につかりながら、あやめが外の景色を眺める。

織鶴が音もなくあやめの隣により、湯船の中であやめの足に手を触

れさせた。
「……ん？」
あやめが視線を足元に向け、織鶴が腿を触っていることに気づく。
「ちょ、ちょっと、河居さんっ⁉」
織鶴の頭を両手で押さえて押しのける。
「うへへ、綺麗な足ですなぁ」
織鶴は姿勢を直して、あやめの隣に座った。
眉を寄せるあやめに苦笑いを返しながら、まぁぁまぁぁと両手をあげる。
「いや一なに考えてるのかなって。今日ずっと上の空だよね」
あやめが目を丸くする。
「ええっ、そんなことないよ」
「そ？　ならいいんだけどさ」
微笑んで、織鶴も外の景色に目を向ける。
「ただ、なんか……」
あやめも同じように、視線を戻した。
織鶴があやめの横顔を見つめる。
「好きってなんだろうなって」
眉を上げて、口を閉じたままにんまりと笑みをうかべた織鶴があやめりまうこ身を寄させる。

めのほうに身を寄せる。
「ほうほうほう。なになに、あやめちゃんも恋してるの？」
あやめが織鶴に顔を向け、すぐにまた前を向く。
「違うよ……喜羽くんと文実、今頃どうしてるんだろうなあって」
「あ、なるほど。あの二人ね」
織鶴は寄せていた体を戻し、あやめと肩を並べて窓の外を向いて、顔を少し上に向けた。
「ふーむ。青春してますよねぇ」
「翔、告白とかされたらどうするんだろ……全然想像つかないなあ」
浴槽の底に両手をついてうしろに身をあずけながら、織鶴が深く息を吐く。
「先輩を落とすのは、難しいでしょうねぇ」
あやめが振り向いて、織鶴のほうを見る。
「そうなの？」
「あの人はすごく合理的な人ですから。なかなか素直には生きられないでしょうねぇ」
「翔が……合理的」
「あやめちゃんは、先輩の家庭事情とか聞いたことあります？」
「ううん、そういうのはないかな」
首をふりながらあやめが言った。

「ふむ」
掛け流しの湯に浮かぶ葉を、織鶴の視線が追いかける。
「まぁ……本当は私が勝手に話すべきことではないんですけど……」
あやめが織鶴の顔を見つめる。
「先輩、高校生のときに家出してるんですよ。それからたぶん……ずっと一人暮らしなんじゃないかな」
「えっ」
「家にいづらい事情があったみたい」
「事情……」
「漫画家の道を認めてもらえなかったり、とか」
「そう、なんだ……」
「進学するお金も用意できなくて、とにかく独学で漫画家の道に進んで頑張ったようでね。だから、人に頼ることをしないのよ」
「……」
あやめは目を伏せて、揺れる水面をぼんやり眺めた。
しばらくそうしてから息を吸い込み、織鶴に目を向ける。
「河居さんは、昔から翔と仲良かったの？」
「んー。一緒にゲームもしてたり、話す機会は多かったけど……、今とはまた違う関係というか……」
あやめは織鶴の顔を見つめて、言葉の続きを待った。

あやめは織鶴の顔を見つめて、言葉の続きを待った。
「本当に話すようになったのはこっちで再会してからで、昔はあんなにオープンじゃなかったよ。先輩、漫研でも神格化されてて、微妙に浮いてたからね」
「そうだったんだ……。今の翔からは全然想像つかないな……」
そうつぶやいてから前を向き、あやめは遠くの景色を眺めた。
「それだけ、漫画を描くことが好きだったんだね」
織鶴はあやめの横顔を後ろから見つめたあと、空に目を向けた。
「……どうなんでしょうね」
身を起こした織鶴の視線があやめの身体に向けられる。
その一部を、織鶴が凝視する。
「ちょっと待って」
あやめが織鶴に顔を向ける。
「ん？」
「あやめちゃん……まだ生えてないの？」
「へ？」
織鶴の視線を追って、あやめが自分の下半身を見る。
「ちょっ」
織鶴の反対側に身体をひねり、両手で腿の付け根を手で隠す。
「ち、違うっ。これは……っ」

「これは？」
頬を紅く染めたあやめが、じとっとした目で織鶴をにらむ。
イタズラっぽく見上げる織鶴を見下ろして、あやめがため息をつく。
「これは、かぶれるといけないので、剃ってるんです……」
織鶴が広げた手のひらを反対の手でぽんと叩く。
「なるほど！」
今度はあやめが、織鶴のほうに身を乗り出して、お湯の中の織鶴の身体をまじまじと見つめる。
「じーーーー」
「あっ!!」
身体を縮こまらせて、織鶴が自分の前面を腕と腿で隠す。
「こっち見ないで。あやめちゃんのえっち」
口角を少しあげたまま、あやめは織鶴の身体を見つめた。
「えっと、大人っぽくていいと思うよ？」
織鶴が微笑む。
「ありがとう！」

ガラス張りの壁の前にあやめと織鶴が並ぶ。
椅子に座った織鶴が牛乳ビンに口をつける。
その隣に車椅子をつけ、あやめも手に牛乳ビンを持っている。
並んだ二人が外の景色を眺める。
「あやめちゃん……。お風呂でちょっとさ、気になることがあったんだけど……」
あやめが織鶴のほうを向き、首をかしげる。
「ん、どうしたの？」
織鶴もあやめの視線を見つめ返す。
「あやめちゃんの、背中というか……尾てい骨辺りの痣みたいなのって、やっぱり……」
「あざ？」
あやめが首をひねって自分の背中に視線を向けて、また織鶴に戻す。
「なにかあった？」
目線を逸らした織鶴がぽりぽりと頬をかく。
「あ、いや。痣だったのかはわからないけれど、模様みたいになってたから……ちょっと気になって」
「え、うそ……全然気づかなかった」

「織鶴が目を見開く。
あやめが前を向いて、小さくうつむく。
脱力した口を小さく開き、無表情に手元の牛乳ビンを見下ろす。
「うーん。誰かとお風呂なんてしばらく入ってなかったからな……」
「あ、そうだよね」
俯いたあやめの横顔を盗み見てから、織鶴が牛乳ビンに残った中身を飲み干して机に空き瓶をおいた。
考えるような面持ちで、天井を見上げる。
「そういえば」
明るい声色で織鶴が言い、あやめが織鶴のほうを向く。
「デザインの勉強は、順調？」
楽しげな苦笑いを浮かべながら、あやめが再び前を向いた。
「んー、グループ課題で色々実践できたから、慣れてはきたかも。ウェブサイトの作り方も一緒に勉強してるけど、自動制作ツールが優秀すぎて、手を加えるところがないっていうか……」
「ふむふむ。まあ、基本的な概念を知っていて、どういう意図でそう作られたか理解できることが大切だから、いいんじゃないですかね」
「河居さん、デザインの仕事もしてたの？」
「ん、まあ、簡易的なものばかりだし、全部機械任せだったけどね

ん、まあ、簡易的なものばかりで、殆ど模倣似せたったけどね」
机におかれたパンフレットを織鶴が手にとり、ひらひらとゆらす。
「大学は視覚デザイン専攻だったんだ。まあ、一年目の終わりには目標が変わって、まじめに勉強してなかったんですけどね」
「うわあ、なんだ。ベテランじゃないですか」
あやめが手元の牛乳ビンを持ち上げて、飲み口に唇をつける。
「みんな優秀で嫉妬しちゃうな……」
織鶴が目を細めて、少し微笑んだ。
「いや、本当続けてこなかったんで、ぺーぺーですよっ。でもまあ、いいと思いますよ、デザイン。やって無駄になる事はないかな」
パンフレットを開き、パラパラとぺージをめくりながら織鶴が言った。
そのしぺージで手を止め、あやめのほうに突き出す。
「デザインとは、ある問題を解決するために思考、概念の組み立てを行い、それを様々な媒体に応じて表現することであるっ」
あやめが、差し出されたパンフレットから織鶴の顔にゆっくり視線を移す。
「大学で耳にタコができるくらい聞かされましたよ。でも、むしろデザイン以外の活動を始めてから、腑に落ちたりして。結局、デザインの概念は全てに共通する基盤なんだなって」

あやめは織鶴の顔を見つめて聞いていた。
「基本は全て繋がるところがあるから。それがわかると、他のことを考えるときにも理解しやすくなると思うよ」
織鶴もその視線を見つめかえす。
「なるほど……」
あやめは両手で牛乳ビンを持ったまま膝の上におろした。
「河居さんといると、色々勉強になるね」
「あはは……」
織鶴が後頭部をぽりぽりとかく。
「私、こういうお節介なこと素で言っちゃってたりするから、嫌だったら言ってね」
「ええっ、ぜんぜん。本当に勉強になるなあって、思ってたよ」
「そう言ってもらえると。いいな一って思ったものをつい共有したくなっちゃってね……」
立ち上がった織鶴が軽く伸びをする。
「あ、あやめちゃん、牛乳ビン捨ててくるから、それ貰っていいかな」
「あ、すみません。ありがとうございます」
ひざに抱えていた牛乳ビンを織鶴に差し出す。
「い、い

「いぇいぇ」
両手に一本ずつ牛乳ビンを持ち、織鶴がゴミ箱に向かう。
織鶴の背中で揺れているポニーテールを、あやめが見つめる。
机に視線を戻し、パンフレットを手に取る。
膝の上で開くと、『月乃海岸』『絶景、夜明けの祝福』というリード文が目に入った。
開いたページをしばらく見つめてから、パンフレットを机におきなおす。
顔をあげて周囲を見渡すと、すぐ隣にあるグランドピアノに目がとまった。
「……………」
「おっけー。じゃ、一旦部屋に戻ろうか？」
空きビンを捨てて戻ってきた織鶴の声がしてあやめが振り向く。
「あ、うん。そうだね」
あやめの車椅子の後ろ手にたった織鶴も、あやめが見ていたグランドピアノを眺めた。
「グランドピアノってちょー高いんだよね。これって弾けるのかな、なんかアンティーク風だけど」
「調律されてるかはわからないけど、弾けると思うよ」
織鶴が目を丸くしてあやめを見下ろす。

「あやめちゃんってピアノ弾けるの？」
「えっ？　ああ、ううん。ピアノは……。弾けた……ような」
「ええ――!!　すごい、聞いてみたい！　弾いてよ弾いてよっ」
「いやいやいやっ。勝手に触っちゃいけないし、やっぱり弾けないからっ」
「ええー なにそれっ。私、受付の人に聞いてきちゃおー！」
「ちょ、河居さんっ」
あやめの静止も聞かず、織鶴が身を起こして受付のほうへと向かう。
そうなってしまえば、あやめに止めるすべはない。
「もう、弾けないって……」
ぽつりとつぶやきながら、グランドピアノへと向き直る。
漆黒に磨かれたグランドピアノ。
その表面には、無言のままそれを見据えるあやめの顔が映っていた。
――その光景は、絶景と呼ぶにふさわしい場所だった。

小夜湖。翔と喜羽が足を踏み入れたそこには、その名の通り小さな湖が広がっていた。
静謐な湖面と、そこに移り込む山と空。
その景色をじっと見下ろす喜羽の隣で、翔がカメラを構える。
オートフォーカスのピントが合う音がして、ぱしゃりとシャッターが切られた。
「すごい、思ってたよりもずっと綺麗。夜になって星空が満天になれば、またきっと違う景色が見られるんだろうね」
「そうだな」
「確かに、このすごさは実際にきてみないとわからなかったかも。あやめに感謝だね」
喜羽はうなずいてからその場にしゃがみこむ。
透き通った湖に映った空がゆっくり揺れるのを眺めたあと、空を見上げた。
「きっと、あいつの見ている景色は他の人と違う。いつも視線は低くて、見上げるばかりなんだろう」
「……………」
「俺たちが簡単に行ける場所に、星乃が行けないこともあるし。同じ場所にいても、目を向ける方向が俺たちとは全然違う。星乃にカメラを持たせたら、新しい景色が見られるかもしれないな」

空を見上げる喜羽の横顔を、翔は黙って見下ろしていた。
その視線に気付いた喜羽が、翔の視線を見つめ返す。
「なんだ？」
「喜羽くんって、すごく良い目を持っているね」
「はは、君島には敵わない。君島の見ている世界も、きっと俺とは違うんだろう」
「……どうしてそう思うの？」
「着眼点が違う。同じ課題をやってもいつも想像の上をいくし、人が見向きもしないようなところを、君島は美しく昇華させる。君島と同じ視点を意識しても、君島はいつも違うところを発見する。その度、俺は考えを改めさせられる」
「あはは。その言葉は、そっくりそのまま喜羽くんにお返しするよ。私もあなたには敵う気がしない」
「ん？　まあ、君島にそう評されるのは悪い気がしないな」
翔は微笑んでから、喜羽にカメラを向けた。
喜羽がしゃがんだままレンズをのぞきこむ。
「？」
翔がシャッターを切る。
そのあと、翔も喜羽の隣にしゃがみこんで、自分の周りにカメラを

向けた。
周囲の景色を何枚かカメラにおさめる。
「ああ、確かに」
色んな方向にカメラを向けながら、翔がつぶやく。
「世界はとっても広いね」
カメラの画面から目をはなし、翔はしゃがんだまま湖をぼんやり眺めた。
「君島は、写真が好きか？」
「う一ん。本当は手ぶらが好きかな」
翔が手元のカメラを見下ろす。
「写真は、資料集めの一環」
「ほう」
「ああ、いや……。本当は好きかも、写真を撮りながら色々な場所を回るの。んで、なんか記録にまとめて、それを本にしたりとか、そういうのも楽しそうだね」
翔がカメラを鞄にしまう。
「まあ、今はやらされてるって感覚だから」
喜羽が立ち上がり、翔を見下ろした。
翔は湖を眺めている。
「好きなものを、ずっと好きでいられたらいいのにね」

「そうは、いられないのか？」

「難しい問題だよね。最初は失うものがなにもないから、無我夢中で追いかけられる。でも、なにかを手に入れると現状維持を始めて、いつの間にか悪いところばっかり目につくようになってる。結果、今度は失うことばかりになる」

　翔が空を仰ぐ。

「だから、私は終わらせて、新しい人生を歩みたい。そう思うんだ」

「奏くん、今日のお誘い……迷惑じゃなかった、かな？」

　唐突だったその言葉に八馬は目を丸くして、眼前、俯いた文実を見つめていた。

　フォロ―するような殊更柔らかい声音で、少しだけぎこちなく微笑みながら八馬が言葉を返す。

「いえ、そんなことはありませんよ。すみません、ちょっと呆然としていましたよね」

「……………」

　両手の指を合わせてから、文実が視線を逸らす。

口を開いてなにかを言いかけて、そのまま口を閉じる。
その様子を眺めていた八馬が顔を伏せた。
「えっと……」
テーブルにおいた両手を重ねて、文実を見る。
「文実さんは、もう学園での生活は慣れましたか？」
「えっ」
文実が顔をあげて八馬の視線を見つめ返す。
「あ、うん。同居人がいるっていうのはなかなか慣れなかったけど……まあ、織鶴はあんなんだし。この計画に参加するときに考えていたことは、それなりにこなしているとは思う」
「そうですか」
「奏くんはどう？　なんとなく、忙しそうにしているイメージがあるけれど……」
「……そうですね、トライメント計画は期間が一年間しかありませんから、少し焦ってはいます。もともと、よく生き急いでいると言われていたので」
「……そうだよねえ……」
八馬の苦笑に対し、文実も同じ表情を返しながら、視線を自分の足元に向けた。
ヨヽ少兵こ、素己り亦がりこってヽた。

足についた砂を眺めながら、文実が口を開く。
「もしかしてなんだけど、奏くんは一般の学園生とは違ったりするのかな？」
「それは、どういった意味でしょう？」
「その……よく運営のお手伝いしてるでしょ。特待生とか、そういう制度ってあったりするのかなって」
「いえ、ほとんどは自主的なものです。僕はもともと、伊砂先生に憧れて計画に参加した面もありまして……まあ……」
少しだけ、言い淀んで。
八馬の視線が、テーブルの上で組まれた両手に注がれた。
「伊砂先生とお話しする機会を作るため、というのが本音ですね」
「……」
意外な言葉に、文実は小さく息を飲む。
「そう、だったんだ……私はてっきり、奏くんは運営側の人なのかと……」
「まあ、まったくの無関係……というわけでもないんですけどね」
「あ、やっぱりそうなんだ」
「……そんなに怪しく見えましたか？」
「あっ、いや━……」

文実はしばらく視線を泳がせた後、観念したように切り出す。
「……実は、奏くんの載った記事、端末でみつけちゃって」
「……記事？」
「あ、たぶん、文部科学省に居た頃のやつで――……」
「それはまた、よく見つけましたね」
「あはは、うん。……あははは」
「まあ、当時の活動の延長線上に今の行動があるのは確かですね。皆さんがそれぞれ目的を持ってこの計画に参加したように、僕にも叶えたい願いがあって、そのために行動しています」
「…………」
机の一点を見つめて八馬の言葉を聞いていた文実が、手をのばしてコップをとった。
呆然とした表情でストローをくわえて、中身を吸い上げる。
水と空気が混ざって、ずるずるという音が鳴った。
コップをかたむけて、透明な丸底を見つめる。
そのあとで、視線を八馬に向けた。
「奏くんはやっぱり……今は夢を追いかけていて、忙しいんだよね」
「……」
八馬が目を伏せる。
「まあ　そうですね」

「……まあ……そうですね」
「……………」
俯いた文実が唇を噛む。
そのまま上目使いで八馬を盗み見て、ゆっくり口を開いた。
「あ、あたし、邪魔になってるよね……？」
八馬はピクリと体を跳ねさせて目を丸くする。
「いえ、むしろ僕が文実さんの時間を奪っているように思えます」
文実が顔をあげて、正面から八馬を見合える。
口を大きく開けて、すぐに閉じる。
再び、文実は俯いた。
「………」
「………」
八馬が、残りのジュースを飲み干して、空になったコップをテーブルに戻した。
靴下と靴を履いて立ち上がり、二人分のコップを手に持つ。
「一緒に捨ててきますね」
「あ、うん。ありがとう」
見上げた文実に微笑みを返し、八馬が近くのゴミ捨て場に向かう。
その後ろ姿を目で追いながら、文実はテーブルに顔を伏せた。
コップを捨てた八馬がテーブルに戻ってくる。

「大丈夫ですか？」

文実は机に突っ伏したまま、両手を前に出して右手で左手首の脈を押さえる。

「脈がありません。死んでいます」

「……すみません」

文実は動かない。

しばらくそのまま止まったあとで顔をあげて、八馬を見る。

「と、まあ、織鶴の真似をしてみました」

口角をあげて、にんまりと文実が笑う。

「あたしは大丈夫」

「……」

文実も自分の足元においてあった靴と靴下をはいて立ち上がる。

八馬を真っ直ぐ見つめて、文実はもう一度微笑んだ。

「それじゃ、奏くん。そろそろ旅館へ戻ろっか」

八馬も文実に微笑みを返す。

「はい」

——それは、少女の脳裏に刻まれた、決して忘れられない光景。

――それは、少女の脳裏に刻まれた、決して忘れられない光景

大観衆で埋め尽くされた、照明が落とされた広いホール。

緊張感の張りつめる会場、その中央の壇上に、少女は自分の足で立っていた。

「表彰状、星乃あやめ殿。第57回アルテ・ピアノコンペティション、全国決勝大会にて頭書の成績を収められました。ここにその栄誉を称え表彰いたします」

恰幅の良い初老の男性が、表彰状を少女へと手渡す。

少女は両手を伸ばし、恭しくそれを受け取った。そして、深く一礼。

あわせるように「おめでとうございます」のアナウンスが響き渡り、会場はすぐさま拍手喝采の流れとなった。

もう、何年も昔の話だ。

「……演奏を終えたあやめが、グランドピアノの鍵盤から手を離す。

「す、すっげー」

心の底からの驚嘆の声が、織鶴の口から漏れ出でる。

「なになに、あやめちゃん、めちゃくちゃ上手じゃん！絶対プロで

しょ!!　素人でもわかるよ！」
叫びながら、織鶴がひとり拍手喝采。
そのあとで腕を組み、何度も一人でうなずいた。
「いやーすごいもの見せてもらっちゃった。やっぱりこっちに残って正解だったなー、先輩に自慢しちゃおっ」
「…………」
あやめは鍵盤から目を離さない。
震える手を、自分の膝の上においた。
身体を車椅子の背もたれに預け、深く息を吐く。
その後で、織鶴の方に顔を向けた。
「河居さん、みんなには私が演奏したこと、秘密にしてもらえないかな。その……。翔にも」
「えっ？」
あまりに意外な言葉に、織鶴が一瞬自らの耳を疑う。
「あっ、うん。もちろん大丈夫だよ。でも、どうして？」
あやめはもう一度ピアノのほうに向き直り、鍵盤を見つめる。
ピアノの蓋に手をのばし、音もなく閉じた。
鍵盤が蓋に覆い隠される。
「期待されたくない。ピアノを弾けるって思われたくない。多分、そ
う感じることは、私にとってピアノは忘れたい思い出の一つなん

う思しをってことは、私にとってピアノは忘れたい思い出の一つだったんだ」
「……」
車椅子を引いてグランドピアノから離れ、織鶴のほうに車輪を進める。
「ごめんね、河居さん。せっかくきいてもらったのに。……部屋に戻ろっか」
そう言って、あやめは車椅子のハンドリムを押し込んだ。
織鶴はしばし、その背中を眺めたままぼうと立ち尽くす。
初めて聞いた、あやめの心情。その表情に、織鶴も思うところがないではなく。
「みんな、いろいろあるんだなぁ」
分かったように、そう呟いて。
努めて明るい表情を作りながら、織鶴はあやめの背中を追いかけたのだった。
……夕刻。それぞれがそれぞれの場所で時間を過ごし、旅館へと戻ってきてしばらくした後。

食べ物やお酒なんかを調達するため、翔と織鶴は買い出しにへと出かけていた。
翔の運転する小さなワゴンが車道を走る。
助手席に座る織鶴は窓から景色を眺めていた。
「スーパー、間に合いますかね」
翔が一瞬、視線を車内のデジタル時計に向ける。
「まあ、買うもの決まってるし、駆けこんでサッと買えばなんとか」
「ふむふむ。まあ、買うとしても飲み物とつまみくらいですかね」
織鶴が、外に向けていた視線を翔の横顔に移す。
「先輩と一緒にお酒飲むの、何気に初めてじゃないですか？」
「そうだね。そもそもこっちにきてから一度も飲んでなかったしね」
「私も最近はからっきしですね」
言いながら、織鶴の視線が前方に移る。
「でも今日は文実の話を聞いてやらないといけないから、控えめにしておきます」
あながち冗談とはいえないその言葉に、翔が苦笑いを浮かべる。
……赤信号で車が緩やかに停車した。
数少ない街灯が、枝分かれした道を薄暗く照らしだす。

うーん。八馬さんにねー。ちょっと私と同じ匂いがするんだよねー」
「あー」
　翔の言葉に、織鶴は相槌を挟んで。
「うん。たしかに似ている部分はあるかもしれませんね」
「といっても、八馬さんのほうがずっと大人っていうか、ちゃんと計画を持って行動してるなーって思うけどね」
「自由学習では、話したりするんですか？」
「んーん、全然。自由学習ってほぼ個別作業だし、私もほとんど部屋に引きこもってるから」
「まあ、そうですよねえ」
　信号が青になり、ゆっくりと車が進み始める。
「喜羽くんは、どうですか？」
「喜羽くん？」
　正面を向きながら、翔がハンドルをゆっくりと回す。
「喜羽くんは、本当いい子だよね。純粋ていうか……私、ああいう人に会ったことなかったから……。今時こんな純粋子が、本当にいるんだなーって感じ」
「ほう」
「気を遣わなくていいし絡みやすいから、一緒にいてすごい楽だ

なー」
「意外と高評価ですね」
「ええ、なにそれ」
織鶴からの謎な言葉に、翔が笑う。
運転は続けながら、両手の人差し指でトントントンとハンドルの外枠を叩きつつ、言った。
「……まあ、あれですね」
「ん？」
「個人的に、喜羽くんと八馬さんの組み合わせはスキ」
「うわあ」
織鶴がグイッと身体を引いて翔と距離をとった。
翔がニヤリと口角をあげ、不敵に笑う。
それを見返して、織鶴も笑った。
「……なんか、先輩が相変わらずでちょっと安心しました」
「ただいまー、いろいろ買ってきたよ」
ビニール袋をぶら下げて、翔と織鶴が部屋へと戻ってくる。

おかえりなさい、というあやめの声とともに、翔と織鶴を出迎えたのは、あやめの膝に顔を埋めている文実の姿だった。
「あらら」
文実の話を聞いてやらないといけないから、という織鶴の言葉がひどく現実味を帯びている光景。
翔と織鶴の表情に対し、文実の頭を撫でながらあやめが軽く苦笑した。
「男子二人はまだ帰ってないの？」
部屋に、喜羽と八馬の姿はない。もちろん、だからこその文実の態度とも言えるわけなのだが。
「うん、まだみたい。もしかしたらあっちの部屋にいるのかも」
「ふむふむ」
「文実、寝てるの？」
「どうかな」
あやめが文実を見下ろしてから織鶴に顔をむける。
すると、ゆっくりと文実が身を起こした。
「……おかえり」
「ただいま。お酒買ってきたけど。飲む？」
「……一本だけ飲む」
「おっけー。好きなの取るといいよ」

織鶴がテーブルに買ってきたお酒を並べていく。
「あやめちゃんはお酒飲む？」
「私、お酒飲んだことなくて。どういうのがいいんだろ……」
「あ、そうなんだ。まぁ無理に飲まなくていいよ」
「私、飲みやすいの選んだから一口飲んでみたら。苦手だったらやめておけばいいし」
「うん、そうしようかな」
あやめが、翔から甘いお酒を受け取る。
文実は梅酒サワーと書かれた缶を手にしていた。
織鶴はビールを手に取り、全員にお酒がいきわたったことを確認して、プルタブを引く。
「よし、じゃあ私らでとりあえず乾杯しちゃいましょうかっ」
ぷしゅっ、と小気味のいい音とともに、缶を掲げて。
翔と文実もプルタブを開けた缶を前に出した。
あやめは、薄いピンクの液体が少量注がれたコップを手に持つ。
四人の声が、重なった。
「乾杯っ」

「うわあああんっ、まだっ、まだ、ろくがつなのにい、あたしこれからどうすればいいんだよぉ〜〜」
「よしよし。私らでよかったら、これからも話聞くからさ」
喜羽と八馬は、扉一枚隔てた向こうから聞こえてくるそんな会話に、ふと足を止めた。
「なんだ……？」
「正明」
前へ進もうとする喜羽の肩に八馬が手をおいて制止する。
喜羽が振り返ると、八馬は人差し指を立てて口に当てていた。
「ん……」
八馬が部屋の外を指さし、そのまま静かに扉を離れる。
すると、気配に気づいたか、翔が扉から顔を出した。
「ちょっと、ロビーの方にいてもらっていいかな。私ら文実を連れて温泉入ってくるから」
「ああ、いえ。僕たちがはけます」
「ううん、私もまだ温泉入ってないからさ。貸し切り風呂がもう使えないから、あやめのことお願いしたくて」
「なるほど。そういうことでしたら」
喜羽と八馬が、文実と鉢合わせにならないよう扉から距離を取る。

翔が顔を引っ込めようとしたところで、八馬が言葉を継いだ。
「その……文実さんをよろしくお願いします」
その言葉に、翔は目を丸くした後、「任せて」とほほ笑んだのだった。
……そうして、二人はロビーへ。
状況をうまく飲み込めていない喜羽に対し、八馬が――自分のことのためやや曖昧な表現にはなるが――事情を説明する。
「なるほどな。事情は分かったよ」
両腕を組み、喜羽は世闇に包まれた窓の外を見つめる。
「しかし、そうか……お前には夢があるからな」
「別に、夢と呼べるような……そこまでまっすぐな願いではないさ。ただ……自分に変えられることがあるなら……行動すべきなんだろうっていう、消極的な想いだよ」
「それにしては、全てを捨ててでも実現しようっていう、強い意志を感じるけどな」
「なにもできない自分は嫌なだけだよ」
「……そうか」
八馬が小さくうなずく。
「まあ、奏は話を聞いてほしいって柄でもないだろうからな。俺にで

きることがあれば、言ってくれればいい。夏杞のことは、俺のほうでもうまくやっておくよ」

「……悪いね。正明には、迷惑をかけるよ」

「なに、友達だろ」

そう言って喜羽が微笑んだ。

視線を足元に落としてから、八馬も微笑む。

「……ああ、ありがとう」

「星乃、待たせた――」

「おそお――――いっっ」

旅館の客室。

喜羽と八馬を迎えたのは、ひとりでお菓子をつまんでいたあやめの叫び声だった。

「……悪い」

喜羽に続いて部屋に入ってきた八馬が、その様子をうしろから見守る。

あやめが自分の隣を、ぽんぽんと叩いた。

「はやく。こっちに来なさぃ」

「あ、ああ」
　観念したように靴を脱いで、畳の上にまず喜羽が、続いて八馬が上がる。
　テーブルを挟んであやめの向かい側に、喜羽と八馬が並んで座った。
「喜羽くんはこっち」
　自分の隣を叩きながら、あやめが重ねて言う。
　喜羽と八馬の視線が合うも、八馬はうながすように手を向けるだけ。
　喜羽は立ち上がり、テーブルに回り込んであやめの隣へと座った。
「まずは乾杯しましょぃ」
　手前の缶を手に取り、あやめがプルタブを開ける。
　そこで、ようやく喜羽が気付いた。
「おま、それ酒か。なんだ、星乃。お前酔ってるのか」
「はぃ？　べつに、ちょっとだけだから。へーきへーき。いいから、はやくぅ、のむのっ」
　ブンブンと缶を上下に振り、液体がテーブルに零れる。
「おい、おまっ、やめろ。こぼれてるって！　わかった、飲むからちょっと待ってろ」

近くのティッシュを数枚とって、喜羽がテーブルを拭く。
それから、手近な缶を一つとった。
「正明、お酒は飲めるのかい?」
「ああ。大丈夫だ。大学でも飲まされていたからな」
「そうですか」
八馬は空いていない缶を手元に寄せて、テーブルの下に隠す。
そこから一本取り、プルタブを開け、あやめのほうに前に掲げた。
「かんぴゃいっ」

畳の上に大の字で寝る喜羽を、翔が揺する。
「うーん、これはダメそう」
宴の後。風呂上がりの翔が、ため息交じりに呟いた。
ベッドの横に立っていた八馬が翔の方を振り返る。
あやめはベッドで静かに寝息を立てていた。
……突如始まった宴会は、絡み酒のあやめと喜羽に対し、八馬がひたすら耐え忍ぶという構図だった。
八馬が言われた言葉をそのまま抜粋すると、こんな感じになる。
『そうだぞお前、好みとかは夏己でよくわからんがすごく良い奴だ。

[illegible]
もう少し付き合ってからよかったんじゃないか、判断しても』
『そうだよっ！　文実は良い子でかわいいんですよ。もっとお話しすれば考えもっ、変わるっかもしれませんじゃないですかっ』
『人はよらない見かけだからな。ああ見えて、知識や社会に対する基本的は俺よりも理解がよっぽどで、頭も常識だ』
『そうなんですっ。普段の姿からはあまり想像しづらくてあまり想像できないかもしれません。がっ。ちゃんと将来を考えていて、自分の生活基盤をちゃんと持ったうえで、将来を考えているんですよっ』
『あればいい嫁に間違いない後悔を後で絶対だ。素晴らしい決断をありがとう』

……。
八馬としては「すみません」と言って落ち着かせるよりほかになく、ある程度お酒を隠して酒量を抑えさせはしたものの、残されたのは惨状と言って差支えないこの状況だった。
あやめについては、自分の部屋だからまだわかる。
問題は、他人の部屋で眠りこけてしまった喜羽だった。
「こちらは大丈夫そうです。だけど、流石に正明は僕にも運べないですね……」
「だよねぇ」

翔がもう一度、喜羽を見下ろす。

「……どうしましょう、係員を呼んで手伝ってもらいましょうか？」

「いやいや、そこまでしなくても。こうなったら仕方ないでしょ。文実はもう寝たし、八馬くんだけでもそれとなく戻ってもらえるといいんじゃないかな」

「そうですか？　……ありがとうございます。なんか、すみません」

「八馬くんが悪いわけじゃないから」

その言葉に、八馬が深くお辞儀をする。

「正明は、いびき等はありませんから、君島さん達が気にならなければそのまま寝かせておいても大丈夫でしょう。それでも何かあれば、すぐに呼んでください」

「ありがとう。うん、じゃあ私はこっちのベッドで寝かせてもらうよ」

「はい。それでは、おやすみなさい。君島さん」

「おやすみなさい。八馬さん」

喜羽を残し、八馬が退室する。

その様子を見届けて、翔も寝る支度を始めたのだった。

灯りの消えた部屋で、布が擦れる音がかすかに響く。

「――星乃」

音が止まり、再び衣擦れの音がする。

「おい、星乃」

横になったあやめが寝返りうち、ゆっくりと身体を起こした。

「んん……　なに」

目を擦りながら、あやめが力なく言った。

ベッド脇に立つ喜羽が身体を引き、腕を組む。

「やっと起きたか」

あやめがゆっくり、声のほうへ顔を上げる。

「喜羽くん……？　なに、どうしたの。ていうか、今何時……」

辺りをきょろきょろと見回すが、時計は見当たらない。

「四時過ぎだ」

あやめがもう一度、喜羽を見上げる。

「あれ、なんかあったっけ……」

「お前が誘ったんだろ。ほら、準備しろよ」

「へ？」

あやめが目を丸くする。

「ん、まあ、そのままでも大丈夫そうだな。時間がない。ほら」

喜羽が手を差しだし、あやめはそのてのひらを見つめた。
……車椅子を押して、喜羽が暗闇の続く道を進む。
街灯もなく、月明かりだけが喜羽とあやめを照らす。
海辺から潮風が吹き、波音が運ばれてくる。
「ぜんっぜん思い出せない……」
頭を押さえながら、あやめが車椅子に揺られている。
「私が誘ったんだよね……確かに、気になってはいたけどさ……」
「まあ、あれだけ酔っていればな」
「酔った勢いって怖いね……ていうか、喜羽くんはよく覚えてたよね」
「俺は酔ってなかったからな」
「なんか……八馬さんにあとで謝っておこう……」
虫の鳴き声が重なる夜道に、車椅子のタイヤが砂利を踏みつける音が続く。
これから朝を迎えようとする、白く消えゆく満天の星空。
うっすらとした満月が、喜羽の瞳に映る。
「ああ、確かに、今日は綺麗な満月だ

ああ、確かに。今日は綺麗な満月だ」
やがて月乃海岸の駐車場にたどり着くと、喜羽は柵の前で車椅子を止めた。
柵越しに水平線を眺める。
「うわっ……すごい、綺麗……」
揺れる水面の奥側から、明るいグラデーションが伸びている。
「これは、絶景だな」
喜羽が鞄からカメラを取り出し、あやめに差し出す。
「ん、これは？」
「君島から借りた。星乃が撮ってやるといい」
「……」
あやめは喜羽を見つめてからカメラに視線を向けて、ゆっくり手を差し出した。
受け取ったカメラのボタンを一つずつ確認してスイッチを入れる。
カメラを海のほうに向けて、シャッターを切った。
「ここからじゃ、あまり写らないな」
「うん……まあね」
「よし」
喜羽は車椅子のアームレストをあげて、側面がわから背中をむけてしゃがみこんだ。

あやめは口を開けてその様子を見つめる。
「え、なに？」
「おんぶだよ」
「はい？」
「海岸下まで連れて行ってやるから、掴まれ」
「いやいやいやっ」
首を手をブンブンと振る。
喜羽は黙ったまま背中を向けていた。
あやめは、自分に向けられた喜羽の背中を見下ろす。
「ほら、喜羽くん、重いもの持ち上げると危ないし」
喜羽が横顔をあやめに向ける。
「おんぶならそんなに負担はない。星乃がしっかり掴まってくれればな」
「……………」
少し、唇に力を込めてから、あやめは身体をひねって両手を喜羽の首にまわした。
「よし、立ち上がるぞ」
喜羽は両手であやめの体を支えながら、ゆっくりと立ち上がる。
「ふん、軽いじゃないか。余裕だな」
「

「……」
喜羽はあやめの身体を背負い直して、海のほうに歩き出した。
あやめは頬を赤らめて、両腕に力を入れてしっかり喜羽につかまった。
「……海岸に喜羽がゆっくりと降りていく。
「ん、なんだ？」
喜羽が顔を上げる。
誰かの歌声が、二人の耳に届いてきていた。
あやめも前方に顔を向ける。
「誰か、歌ってる……？」
喜羽は再び、海岸に続く階段をゆっくり降りていく。
水平線から朝日が顔を覗かせた。
海の表面に反射する光がゆっくり伸びて、まっすぐに喜羽とあやめを照らす。
「これは……」
まばゆい光に目を細めながら、喜羽はゆっくり前に進む。
そうして、前方。
そこでは白い少女が、陽の光を全身に浴びて可憐な声を響かせていた。
澄んだ空に高く舞い上がる、鈴のように透き通った声。

「……愛の唄」
砂浜に降り立った喜羽が、少女のほうに歩いていく。
「先客がいたようだな」
「……」
喜羽の足音に少女が気づき、歌声がはたと止まる。
光りに包まれた少女が、静かに振り返った。
「…………」
あやめは黙ったまま、首から下げたカメラを少女に向ける。
目が覚めたばかりの太陽が照らした、その一瞬。ふわりと舞った少女の白い髪が、ゆっくりと降りてくる。
あやめは呆けたように小さく口を開いたまま、ボタンに添えた人差し指に力を込めた。
直後、ぱしゃりと。
日の出を背にした白い少女の、まるで絵画のような光景が、あやめの持つカメラに刻まれたのだった――。

禁断の果実

「司。紗希ちゃんと一緒に、ここで待っていてもらえるかな」
中腰になった男性にそう言われ、まだ幼い少年――司は、不安げにうなずきを返した。
背の高い木々に囲まれた、どこか湿り気を帯びたその空間。無数に立ち並ぶ特徴的な石の数と、その合間を埋める白いナズナの花。
そこは、墓地だった。
司に待っているよう言った男性は、踵を返して奥に立つ別の人物の方へと歩き出す。
遠ざかっていく背中を、司は何度も何度も見返した。
「よっと」
隣からは、どさりという何かが落ちた音とともに、少女の声。
司が顔を向けると、今の今まで木に登っていた少女――紗希の姿があった。
紗希は体を起こしながら服を払い、司のほうへと振り返る。
「司くんも、病気なんだって？」
「うん」

「わたしもそうなんだ」
「……」
二人の視線は、互いに前方の墓石へ。
「司くんのは、どんな病気なの？」
「…………。わからない……のうの病気で、原因がよくわからないって」
「……のうの病気……そうなんだ。それも、わたしと一緒だね」
「…………」
顔を上げた司が紗希の横顔を見つめる。
司の視線に気付いた紗希がその視線を見つめ返して、微笑んだ。
その態度に司はとっさに視線を逸らして、また自分の足元に顔を向けながら続ける。
「き、君は、どんな病気なの？」
「……わからないんだって」
「……そっか」
「でも」
司は、言葉の続きを待ったあと、様子をうかがうように紗希に顔を向ける。
紗希は前を向いたまま少し目を細めた。

「シンケイサイボウがシメッしていって、いつかは全て忘れて、動かなくなっちゃうんだって」
「え……」
　司が目を見開く。
「それじゃあ、僕とは違うと思う。君の方が、よっぽど……」
　言い淀んで。
「……その、君は怖くないの？」
「どうして？」
「だって……」
　視線は目の前のお墓へ。
　意図を察して、紗希が答える。
「死ぬことは怖くないよ。ただ……わたし、夢があるんだ」
「夢？」
「そう、夢。……色々なことを知るとね、今までは見えなかった、たくさんのことがわかるようになるんだ。知ればおもしろいこともあるし、逆に怖いものだったんだってわかるものもあって。そんな知らないものを知って、この世界でたくさんのことを試してみたいんだ。それがわたしの夢」
　紗希の表情は晴れやかだ。
それだけに、司の顔が曇る。

それだけに、司の顔が曇る。
「君は、強いんだね。……その病気、できることなら変わってあげたい。僕には、生きる理由なんてないから」
はっきりとした声で、司が言った。
紗希が俯いた司の横顔を見つめる。
「司くん」
身体ごと司に向き直った紗希が司を呼んだ。
顔を上げて、司も紗希を見上げる。
二人の目が合う。
紗希は肩にかけた小さなカバンから花を取り出して、司に差し出した。
「これ、あげる」
紗希の手を見下ろした司がキョトンとした表情を浮かべる。
ゆっくり手を差し出し、紗希の手から花を受け取った。
「これは？」
「ろーずまりー！」
笑顔を浮かべて紗希がこたえた。
その表情を見つめてから、司は自分の手元に視線を向けた。
「ろーずまりー……」
「お母さんに持って行ってあげたやつ、余っちゃったから、あげる」

「……ありがとう」
小さな声で司がそう言い、紗希が微笑みを浮かべる。
「食べていいよ」
「えっ」
目を丸くした司が紗希を見上げる。
「食べられるの……これ」
「うん」
司が呆然と、指でつまんだ花を見下ろす。
茎から一枚、葉っぱをちぎり、まじまじと見つめてから口に入れた。
「……苦い」
紗希は笑顔のまま司を見つめる。
「ねっ、おいしいでしょ」
司はキョトンと紗希を見つめ返し、しばらく紗希の笑顔を見つめてから顔をほころばせた。
「……うん。おいしい」

・
・
・

――無人の廊下に、司の足音だけが響く。

暗闇の世界。月明かりだけが照らす学園で、司が廊下を進んでいく。

階段を上り、さらに先へ。

その先にあるのは音楽室だ。ちょうど音楽室の札が見えかけてきたところで、反対側から一人の少女が歩いてくるのが目に入る。

その姿をとらえた司が目を見開いた。

「……‼」

赤茶色の髪を背中に伸ばした、同年代の少女。

少女もまた立ち止まった司に気づき、歩み寄ってくる。

「二上くんも音楽室？」

口を開けたまま、司は呆然と少女を見下ろす。

ハッと我に返り、少女の視線を見つめてから小さく頷いた。

「そっか」

少女はまた歩き始める。

「それじゃ、また後でね」

司と少女がすれ違う。
司が振り返り、少女の後ろ姿を視線で追う。
しかし、彼女は振り返ることはなく。
「…………」
少女の姿が廊下の奥へと消えた後、司は再び歩みを再開して音楽室へ。
扉を開けると、月明かりに照らされたグランドピアノ。
譜面台には、真っ白な楽譜がおかれていた。
「…………」
白紙の楽譜を、司が見つめる。
小さく口を開けて、鍵盤に手を伸ばす。
「司くん」
「！」
いまにもその手が鍵盤に触れようとしたところで、司の服が背後から掴まれ、引っ張られる。
司の服をつまんだミリャが、司を見上げていた――。

・
・
・

「差し込む朝日に目を細めて、司がゆっくり目を覚ます。

顔を横に向けて辺りを見回す。

草花が生い茂った床に、くすんだ家具がおかれている。

反対側に顔を向ける。

「……………」

同じベッドで、ミリャが司にピタリと身を寄せて眠っていた。

しばらくその寝顔を見つめてから、身を起こして足を地面に付ける。

そこで、司は自分が裸足であることに気が付いた。

窓の外、眼下には森がひろがり、視線を上げていくと海が見えた。

「……………」

ベッドから衣擦れの音がして、司が部屋の方を振り返る。

ミリャが起きたようだ。

「おはよう。んっ……ごほっ」

挨拶をかけようとして、思わず咳込む。

「んん……どのくらい寝てたんだ……」

司の様子をよそにミリャが身を起こし、辺りをキョロキョロ見回して自分の靴を発見。そのまま立ち上がろうとしたところで、ふらっとバランスを崩す。

前のめりに倒れるミリャを、司が咄嗟に支えた。

「大丈夫？」

司の腕の中でミリャが顔を上げ、うなずく。

司の腕を掴んだまま、ミリャが窓に歩み寄る。

窓の外を眺めるミリャを見下ろしてから、司は部屋の出口に顔を向けた。

……不可解な感覚に司は眉をひそめながら、ミリャとともに帰路に就く。

バスの後部座席に、司とミリャが並んで座る。

司の目は窓の外へ。

けれども、司のその手は震えていた。

ミリャが司の手を見つめ、そこに自分の手を重ねた。

司が振り返り、ミリャを見下ろす。

「……あれ？」

首をかしげて。

「…………。なんか……忘れてるような……」

司はもう一度、自分を見上げるミリャに視線を戻した。

司はもう一度、自分を見上げるミリャに視線を戻した。
「ありがとう、大丈夫だよ」
「……。……（こく）」
微笑んだ司をしばらく見つめてから、ミリャがうなずいた。
司は再び窓のほうに視線を向けて、外の景色をぼんやり眺めた。

ほどなくして寮に到着し、ミリャとは別れて司が部屋へと戻る。
寝室に理人の姿はなかった。
司は自分の机に向かい、椅子の背もたれに身を預けてタブレットのスイッチを入れる。
しばらく画面を操作していると、玄関が開く音がした。
「あれー、司じゃん。帰ってたの」
片手にビニール袋を下げた理人が部屋に入ってくる。
タブレットから顔を上げた司が理人の方を振り返る。
「ああ、うん。ただいま」
理人は自分の机にビニール袋をおいて、中からおにぎりを取り出す。
「梅とツナマヨ。どっちか食べる？」

「え、じゃあ梅を貰おうかな」

「はいよ」

司は理人から、梅と書かれたおにぎりを受け取る。

「いいの？」

「なんも食べてないんじゃないの？」

「まあ」

理人は自分のおにぎりの封を開け、のりを巻いて口へ運ぶ。

「昨日、どこ泊まってたん？　箒木さんのところ？」

「いや、なんでそうなるんだよ……」

もぐもぐと、理人がおにぎりを咀嚼する。

「……」

「どしたん？」

「……いや」

そうこたえてから、司もおにぎりの封を開ける。

理人が二口目を頬張り、海苔がパリパリと音をたてた。

「理人って、どうやってトライメント計画に参加した？」

「……ん、どうやってって？」

「試験とか、面談とか」

「たぶん、みんなと同じだと思うけど。申し込んで、会場で試験を受

けて、面接して、あと健康診断か。そのあと合格通知もらって、また
面談して、書類を書いて出航。そういうことではなく？」
「いや、それであってる」
　理人が首をかしげる。
　そのあとで前を向き、おにぎりを咀嚼する。
「……ああ……。そういや、当時ネトゲをやってたんだよね」
「ネトゲ？」
「そのゲームのフレンドにこの計画のこと教えてもらってさ。そういえばトライメント計画を知ったきっかけはそんなんだったなって」
「へえ……」
　理人も司に視線を向ける。
「司は？」
「……………。俺は、両親に教えてもらったかな」
「なるほどね」
　理人がおにぎりを口に運ぶ。
「……」
　同じように司もおにぎりを口に運んで、一口かじった。

食事を終えた後。司が机に向かい、タブレットを読みながらところどころノートに書き写す。

理人はプレイしていたゲームの電源を落として、コントローラーを片付ける。

立ち上がって司の背後に立ち、机におかれたタブレットの画面を眺めた。

「それでわかる？」

「一応……でも、実際に触ってみないとなんとも言えないかな」

ノートにペンを走らせながら司がこたえる。

「だろうね。明日、授業のあとパソコン借りて、早速始めてみようか」

「うん、そうだね」

理人が自分のベッドのほうに移動して、鞄の中を漁る。

ペンを持ったまま、司が理人のほうを振り返った。

「ところで、どんなゲーム作るの？」

「うーん、僕にもまだわからないな……。ベースはもちろん決めてるけどね」

「どういうこと？」

「まあ、その点も含めて明日まとめて説明するからさ」

「そっか」
机に向きなおり、ペンをおいて、司は椅子の背もたれに身を預けた。
「……………。理人、ありがとう」
「いやいや、これから司にも色々協力してもらうからね」
「そうじゃないよ」
「ん？」
もう一度机に向き直って、司はタブレットの電源を落とした。

ミリャが教室の中に入ると、座席を埋めている生徒達の視線が一斉にミリャに注がれた。
何人かが大きな声をあげた。
ミリャが壇上に上がるのを確認してから、伊砂が教室を見渡す。
「今日からクラスに復帰することになった、ミリャ・ブランコさんです。彼女はこれまでもこの島にはいたのですが、少し事情があり入学時期は未定、という状態となっていました。すぐにわかると思うので予め伝えておきますが、彼女はうまく話すことができません。そのほかの点に支障はないのですが、言葉が障碍になっていることがあれば

ぜひサポートしてあげてください。ちなみにミリャさんは箒木さんのルームメイトですので、学園の説明などは箒木さんに一任しています。どうぞ、よろしくお願いしますね」

　そう言って伊砂がミリャの肩をぽんと叩いた。

　ミリャがぺこりと、教室に向かってお辞儀した。

……授業が終わり、教室がざわめき始める。

　半数ほどが教室を出て行き、残った生徒達も友人同士で会話していた。

　ミリャがトコトコと、日向子のもとに寄ってくる。

　それに気づいた日向子も、立ち上がってミリャのほうにかけ寄った。

「ミリャちゃん、ごめんね。私たち、このあと資格試験の説明会に行かないといけないの」

　ミリャが、日向子と、その隣に立つ流花の顔を見上げた。

「……（こく）」

「放課後、また会おうね」

　ミリャがＶサインを作って日向子のほうに突き出す。

「大丈夫だよ、箒木さん。俺たちが一緒に作業してるからさ」

　ミリャの後方から、司が声をかけた。

微笑みを浮かべたまま、日向子は司のほうに顔を向けた。
「うん。お願いします」
「そっちも頑張って」
「うん、行ってらっしゃい」
日向子と流花が、連れ立って教室を出て行く。
司は二人の背中を見送った。
「よ、司」
「ん」
司の後方から声がかかり、司が振り返る。
クラスメートの五十嵐が司とミリャを見下ろしていた。
「司、理人とゲーム制作だって？」
「あぁ」
「ふむ……そうか。俺は資格試験だ。またな」
五十嵐が片手をあげながら司に言った。
司が首をかしげる。
「ん、ああ……」
戸惑いを顔に浮かべながら、司も片手をあげてこたえた。
五十嵐は微笑んで、教室を出て行った。
その背中を呆然と、司とミリャが見送った。

・
・
・

ゲーム制作の本格始動。

機材などを借りてくる、と言って理人が教室を出ていった。

人のいない教室で4つの机を向かい合わせにつなげた席に、残された三人——司ともももとミリャ——が座っている。

司が鞄から取り出したタブレットやノートを順番に机に広げていく。

「じーーーーーーーー」

向かいに座ったももが司を見つめる。

「え、何？」

「うーーん？」

「どうしたの、ももちゃん」

「ハイ、ももちゃんです」

そう言ってうなずき、ももは両手を腰に当てる。

口をポカンと開き、司がももを見つめる。

「うん、知ってるけど……」

「司、一昨日ももちゃんと会ったこと、覚えてます？」
「え？」
「夜、学園前の通学路で声をかけましたよね」
司が目を細めた。
それから目を見開く。
「……そうなの？」
「あ、はい」
「……………………」
司は俯いて、手元のタブレットをぼんやり眺めた。
それからゆっくり顔を上げて、ももの目を真っ直ぐ見つめる。
「俺、なにか言ってた？」
「………………」
ももは黙ったまま口に手を当てた。
「……なにか、用があるからと、街の方へ行きましたよ」
「……自分で向かったのか」
ミリャが司の横顔を見つめる。
「司、大丈夫ですか？」
司が顔を上げると、ももが上目遣いに覗きこんでいるのが見えた。
司が微笑みを浮かべる。
「大丈夫だよ」

「…………」

大きな音をたてて扉が開き、手提げ鞄を片手にさげた理人が教室に入ってきた。
三人が一斉に、理人に顔を向ける。
「おまたせー」
理人は机の上に鞄をおき、中から取りだしたノートパソコンをみんなの前においていった。
「これ、スペック足りますか？」
「まあ、これはあくまで情報共有用かな。みんなで話合ったりするときとかにね」
「ふむふむ。それならまぁ」
「みんな、パワポは見てくれた？」
三人がうなずく。
「ミリャちゃんも読んでくれたんだ。まぁ、興味があれば耳だけ向けておいてもらえれば。基本的には自由にしていいからね」
「……（こく）」

「よし、じゃあ改めて簡単に概要を説明するよ」
理人がノートパソコンを開いた。
「今回の自由研究のゴールは、ゲームそのものを自動生成するシステムを開発すること。言い換えれば、人の手を使わずにゲームを作ることが目的ということだね。作るゲームのジャンルは、ARゲームを想定している。島は範囲が決まっているし、リアルなフィールドを遊び場にするARと相性がいいと思ってね。これがチーム全体にとっての目標。次にそれぞれの役割だけど」
理人が自分を指差す。
「まず僕。僕は既存の細かい自動生成ツールを集めて一つのシステムにまとめる。これをゲーム自動生成システムのベースにする」
理人がももののほうを向く。
「このベースシステムを、ももちゃんのAI技術を使って最適化していく」
理人が司のほうを向く。
「今回はARゲームだから、フィールドワークによる検証が重要だ。だからこれを司にお願いしたいと思ってる」
理人が三人を見渡す。
「ゲームの自動生成と言ったけど、今回は、ゲーム内でユーザーに出される課題、いわゆるクエストを自動生成するところを考えてもらいたい。

クエストは言わば一つのミニゲームだ。このクエストを島のあちこちに組み込んで、これをクリアしていくゲームを作る。一つ一つのクエストを人の手で作ると膨大な時間が必要になるけど、これを自動化できる仕組みを作って、作業負担と時間を軽減するイメージ。とまあ、概要は以上かな。まずは習うより慣れろってことで、早速やっていこうか」

・
・
・

廊下の隅に日向子が立ち、ミリャと向き合っている。

ミリャの隣の三国が、日向子を見下ろす。

「ミリャには、荷物を持たせてそちらに向かわせる。私もあとから大きな荷物をいくつか持っていく」

日向子は腿の前に両手を組んで、姿勢よく三国を見上げている。

「はいっ、よろしくお願いします」

ペコリとお辞儀をしながら日向子が言った。

「こちらこそ。ミリャ。行くぞ」

「……（こく）」
そう言って、三国とミリャは職員室へ。
デスクに向かって作業する職員達の間を三国が進む。
そのあとをミリャが追いかける。
自分のデスクの前で三国が立ち止まり、ミリャも立ち止まった。
椅子の横に立てかけられていた大きなリュックを、三国が手に取る。
「持てるか？」
「……（こく）」
三国が差し出したリュックを、ミリャが両手で受け止める。
そのまま、リュックを背負う。
「……（こく）」
「よし。では先に箒木のところへ向かってくれ」
ミリャはもう一度うなずいて、職員室の出口に向かう。
その背中を見送りながら、伊砂が三国に歩み寄ってくる。
「本当、よくできていますね」
「……まあな」
そうこたえて、再びミリャの背中に視線を戻す。
「私には、違和感を感じないことが恐ろしくも思えます」
「」

…………-

三国が二つ重ねて抱えていたダンボールを床におく。

「これで全部だ」

「……（こく）」

ミリャの引っ越し作業。

三国の作業をぼんやり見守っていたミリャがうなずいた。

そのあと、しゃがみ込んでダンボールの一つをあけ、中から洋服を取り出す。

三国はミリャをしばらく見下ろしてから、部屋の玄関に向かった。

「あ、三国先生」

リビングから出てきた日向子が、三国に声をかける。

三国が足を止めて、日向子に顔を向ける。

「もう、帰られますか？」

「ああ。必要な手続きは済ませてあるから、このまま生活を始めてもらって問題ない」

日向子が俯いて、自分の両手を見つめる。

「あ、あの、お茶を入れたので、よかったら飲んでいきませんか？」

「気持ちだけ、受け取っておくよ」
「あ、えっと、ミリャちゃんについて、少しお聞きしたいことがありまして……」
日向子が寝室にいるミリャにちらりと視線を向ける。
「リビングで、その、少しお時間いただけないでしょうか」
三国は黙ったまま日向子を見下ろし、そのあとで寝室にいるミリャの背中を見た。
それから日向子に向きなおる。
「わかった。せっかくだから一杯だけ頂こう」

寝室のクローゼットに、ミリャが服をしまっていく。
クローゼットを閉じて、空になったダンボールを広げて小さく畳む。
立ち上がって、机の本棚におかれたノートを手に取る。
ゆっくりと読みながら、ページをめくっていき、途中からパラパラと流して閉じる。
ノートを棚に戻し、寝室の扉のほうを振り返る。
ミリャは視線を、リビングのほうに向けた。

……ミリャが静かに廊下を歩き、リビングのドアの前で立ち止まる。

　その場に座り込み、耳をドアのほうに向け、聞き耳を立てる。

　日向子と三国が、テーブルを挟んで向かい合う。

「――それで、紗希ちゃんがお花を食べちゃったりして。そんな仕草を見ると今でも思い出すんです。過去のすべてを忘れるようにここへきて、落ち着いた時間もできて、改めて振り返ることができました。私は……過去の彼女に顔向けできるようにって――。自分の生き方を探すこと自体を、自分を救う手段にしていたんです。やっぱり、心のどこかでずっと引っかかっていたんです。どうして、私じゃなかったんだろうって。だから、紗希ちゃんが生きていてくれて、私……本当に、本当に……救われました」

　涙を浮かべて頬を紅く染めた日向子が頭を下げる。

「先生、紗希ちゃんを救ってくれて、本当にありがとうございました……」

「……………。こちらこそ、箒木には感謝してもしきれない。……ずっと、黙っていてすまなかった。彼女の快復は、私にとっても生き

――」

……。

部屋の扉を閉め、ミリャが玄関から廊下に出た。
俯いたまま歩くと、ロビーのざわめきがミリャの耳に届く。
顔を上げると、遠くにももと司の姿が見えた。
司とももはロビーの中央テーブルに並んで座って、タブレットを覗きこんでいた。
「トト、ももちゃんと司は一緒に研究課題をしているだけですよ」
「だからっ、いつもいつも距離がちけーっていってるんですよ!!　ものの邪魔をしないでください!　ゴーアウェイ!!」
「あはは……」
司がタブレットを眺めながら苦笑いを浮かべる。
「大体、ももに仲間なんていらないでしょう!!どーせ足手まといになるだけですしーっ」
トトがタブレットの画面から司をにらみつける。
ももが目をすわらせ、じとっとした目つきでタブレットを見下ろした。
「電源、切りますよ。トト」
トトの体がビクリと跳ねる。
「脅し!　脅しですか!?　ももはトトとコイツ、どっちが大事なんですか!?」
ももがタブレットから視線をそらす。

ももがタブレットから視線をそらす。

「……トトがうるさいからです」

「あっ、なんですか今の間!!　心拍数も跳ね上がりましたよ、もも!」

ももが目をすわらせたまま少し頬を赤らめ、タブレットのスイッチに手を伸ばした。

「あっ、あっ、うそ、うそです!　ごめんなさい!!」

「心配しなくても、ももちゃんを奪ったりはしないよ」

「ええーーーーー」

「ええーーーーーってなんですか、ええーーーーーって!!」

ももがタブレットに視線を戻して、にっこりと微笑む。

ももを見上げたトトがピタリと動きを止めた。

「はい」

大人しくなったトトが画面の中で司側に移動し、目を細める。

「とにかくお前がももから離れればいいんですっ。ただでさえオマエの感じはなんか不快なんですから!」

押し殺した低い声でトトが言い、両手をあげて威嚇するように歯を剥いた。

司が顔に浮かべた苦笑いを濃くする。

「うーん。大分嫌われてるなあ……」

「むむっ？」
トトが叫び、タブレットの遠方に視線を向ける。
「なんかもう一つ混沌的反応が！　もも、後ろです後ろ！」
司とももが首をかしげ、同時に振り返る。
「はれ？　ミリャじゃないですか。どうしたんですか？」
「ん、今日は箒木さんのところへ引っ越しじゃなかったっけ？」
ミリャは頷いてから二人のほうに近付き、机におかれたタブレットを見下ろした。
「あれっ。ミリャさんじゃないですか。あっ、丁度いいところに。この男をどっか連れて行ってくださいよう」
ミリャはトトの言葉に反応を返さないまま、タブレットの画面をペタペタと触った。
「あふんっ。くすぐったいです一っ」
「くすぐったいとかあるんだ」
「司は全然くすぐりが効かないですよね一」
ミリャが顔をあげ、司を真っ直ぐ見つめる。
そのまま距離を詰め、たじろいだ司の脇に手を入れて、指をわしゃわしゃを動かした。
「……っ!?　まっ……まって、ミリャちゃ……」
手を口に添え[illegible]

手を口に添えたトトが、大げさにのけぞる。
「うわっ、うわーーっ！　コイツ感じてますよ！変態、変態です‼
おまわりさーん‼」
「賑やかだな」
後ろから声がして、司とももが振り返る。
三国と日向子が二人を見下ろしていた。
「おわっ。せ、せんせい。びっくりしました一」
三国がミリャのほうに顔を向ける。
「ここにいたか、ミリャ」
ミリャが動きを止めて三国と日向子を見上げ、二人の顔を交互に見
つめた。
その視線を受けて、日向子が軽く手を振る。
「…………」
ミリャも黙ったまま、軽く手を振り返す。
三国はロビーを見渡してから一歩、大きく後ろに下がった。
「邪魔をして悪かったな。私は学園へ戻るよ」
三国は振り返り、そのまま歩き出す。
ミリャがその背中を黙って見つめる。
「あ、ありがとうございましたっ」
日向子がお辞儀をすると、三国が軽く振り返り、手の甲を掲げた。

「引っ越し、終わったんだね」
「うん。これで私もやっと今日から同居生活だよー」
机のほうに振り向きながら日向子がこたえる。
「おおーっ。お疲れ様です、日向子さんっ」
「うん、ありがとう……ってミリャちゃん？」
ミリャが三国のあとを追うように、ロビーを歩き出していた。
日向子はその様子を目で追ってから、司やももに顔だけ向ける。
「ご、ごめん。ちょっと私も行くねっ」
「あ、うん。行ってらっしゃい……？」
日向子が手を振りながら、小走りでミリャのあとを追いかける。
「バタバタしてますねえ」
二人の後ろ姿を見送りながらももが言った。
「もも、私校則違反とかで消されたりしないですよね？」
「へっ？」
ももが勢いよくタブレットを見下ろす。
「……」
それから微笑み、
「大丈夫ですよっ。ちゃんとこの島へ来てからアプリケーションを再構築していますから。研究開発用であれば規則に反しません。まあ、

ダメだったらとっくに注意されているでしょうし、きっとノープロブレムだってことですよっ」
トトが大きくため息をつく。
「ふう、あの先生、私のことすっごい見てたんでビビリましたっ」
顔をあげたももの視線が遠くを彷徨う。
そのあとで目を瞑り、表情を切り替え、ドヤ顔でタブレットを見下ろす。
「三国先生も、ももちゃんと同じ研究者ですから、興味深かったんでしょう。なんせ、ももちゃんの最高傑作ですからね!!」
「キャー!! ももは天才ですう!!」
「仲良しだなあ」
寮から学園側へ、三国が歩いていく。
ミリャがその背中に追いつく。
そのうしろから、息を上げている日向子が追いついた。
三国が振り返る。
「ん……？ どうした？」
ミリャが手を三国のほうに差し出す。

三国が視線を向ける。
白いてのひらの上にナズナがのっているのが見えた。
「……」
ミリャが小さく微笑んだ。
三国がゆっくり手をのばし、そのナズナを優しくつまむ。
「……！」
日向子が膝に手をつき、肩で息をしながらその様子を見守る。
「……」
片手で目頭を押さえる三国の口角が上がる。
「はは……。……懐かしいな、テティ」
目を覆った手の隙間からナズナを見つめ、三国が言った。
しばらくそうしてから、三国はその手をミリャの頭においてゆっくり撫でた。
「ありがとう。ナズナは、お母さんも大好きだったよ」
日向子は口元に手をおき、二人の様子を見守っていた。
三国が顔をあげて、日向子のほうを向く。
「箒木、改めてミリャのこと、よろしく頼よ」
日向子は俯いて軽く目を擦ってから、三国に微笑んだ顔を向けた。
「はい、ありがとうございましたっ」

三国も微笑みを返し、再び学園側に歩き始める。
ミリャがその背中をじっと見つめる。
日向子がミリャの隣に立ち、その手を軽く握った。
ミリャが日向子を見上げ、日向子がミリャを見下ろす。
日向子は微笑みをミリャに向けた。
「…………」
ミリャは日向子の顔をしばらく眺めてから、また学園側に視線をやった。

・
・
・

夜、寮の自室にて。
ももが苦い表情を浮かべて、部屋の中央のテーブルを見下ろす。
そのテーブルを、流花と夏奈が囲んでいた。
「おかえりなさいませ、お嬢様！」
ももを見上げていた夏奈が立ち上がって元気よく叫んだ。
「はあ……」
深くため息をついたももが、夏奈と視線を合わせないまま流花を見

下ろす。

「流花、これはなんです？」

流花がきまずそうに、頬をぽりぽりとかいた。

「ももが、いつまでも喋るタブレットを見せてくれないからと……」

「きちゃった!!」

満面の笑みを浮かべる夏奈を見てから、ももがもう一度大きくため息をつく。

「しょうがないですねぇ……」

「やった——!!」

すかさず、夏奈がその場に正座した。

ももが腰に手を当て、仁王立ちで夏奈を見下ろす。

「……ただし、学園七不思議に入れるのはダメです。それが守れるなら見せてあげてもいいでしょう」

「わかった!!」

「…………」

即答した夏奈を、ももがじとっとした目で見下ろす。

「……本当に、わかってます？」

「喋るタブレットは七不思議にいれない！　それが守れれば見せてもらえる！」

「文言とか変えたり、体裁を整えて載せるのもなしですよ……？」
「まかせて!!」
目を細めて、夏奈をジッと見下ろす。
夏奈は嬉しそうな笑みを崩さずにももを見上げていた。
「……まあ、こう見えて中村さん、筋は通すから大丈夫だとは思うが……」
ももが流花のほうに顔を向け、夏奈のほうに戻し、また大きなため息をついた。
「……わかりました」
背負っていた鞄を右肩だけにかけて、中からタブレットを取り出す。
「ちなみに、喋るタブレットじゃなくて、トトですからね」
ももも腰をおろしてテーブルにつき、鞄を床におく。
タブレットをテーブルにおいて、電源を付ける。
暗かった画面に光が戻るとともに、トトが飛び出てきた。
「はーい！　呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン！」
「ハロー、トト」
「ハロー、もも！　何か御用ですか？」
「すっごーい!!」
夏奈がキラキラしためで、タブレットをのぞきこむ。

画面内で、トトが夏奈のいる方へ視線を向けた。
「あれ、もも、とうとう捕まったんですか？」
「部屋で待ち伏せされていました」
「なるほど……」
「すごいすごい‼　本当に喋ってる‼　こんにちは‼」
「は、はい。こんにちは」
「挨拶した！！！」
夏奈の反応に、ももははにかんだ表情を浮かべて、鼻の下をこすった。
「七不思議に入れないのなら、個人でトトを調べるのは許しますよ」
「ふとっぱら‼」
流花がももと夏奈の様子を眺めながらクスリと笑った。
「……どういう状況ですか？」
「中村さんがお前をよく知りたいんだと」
「はあ……」
夏奈は鞄からノートを取り出し、タブレットを見つめながらペンを走らせる。
ももが夏奈の手元をのぞきこんだ。
「一体、どんなことをまとめているんですか？」

ももの質問に夏奈が顔を上げて、鞄からもう一冊のノートを取り出した。
「いいよ！」
そういって、そのノートをももに差し出す。
「あ、ありがとうございます」
『学園七不思議』と書かれたノートを、ももが受け取る。
目次に目をやり、ももが目を見開いた。
『終わらない春』
「…………」
ももはそのページを開いたまま、ぼんやりその文字を見つめた。
「へぇ……案外ちゃんと気になるような要素でまとめられてるんだな」
流花もももの肩ごしにノートを眺めていた。
ももが流花に視線を移してから、再びノートを眺める。
「なにか気になるのとかある？」
「研究者としてはやっぱり、『終わらない春』と……あとは『白い髪の幽霊』……ですかねぇ」
「あれ、研究者はしばらく封印するんじゃなかったの」
「別に、気になるものを挙げただけなんですけど」
唇をとがらせながら、むすっとしたももが言った。

流花は少し微笑んでから、もう一度目次に目を落とす。
「あたしは、『立ち入り禁止地区』と、『トライメント計画の実態』かな」
「なるほどなるほど—」
ももが目次を眺め、ハッと顔をあげる。
「……あ、そういえば。あれから調べて、その『立ち入り禁止地区』……ついでに『トライメント計画の実態』に関しては、大体見当が付きましたよ」
「えっ」
「本当！！！？」
流花の声をかき消すように、夏奈が叫んだ。
流花とももが、夏奈と距離をとるようにたじろいだ。
「……はい。といっても、あくまで予測ですし、ほとんど周知の事実ではありますが……」
オホン、と咳払いをしてから、ももが人差し指をピンと立てる。
「まず、トライメント計画の実態ですが、これは公社側の言う通り、社会問題を最適化する仕組み作りを目指した計画なのは間違いないです」
「……ほう」

「ここでの社会問題というのは例えば、少子高齢化問題、大量の企業が倒産したことによってできた不良債権、政府の借金などです。結果、一般市民には生活苦のような形で跳ね返ってくるわけですが、この問題に手を打った民間企業がありましたよね」

流花がうなずく。

「『LieF』だな」

ももがうなずきを返した。

「そうです。そして、その事業拡大を大きくサポートしたのが人工知能『ReliеF』なんです」

そういって、テーブルのタブレットを指さす。

「このタブレットを制御しているのは汎用型のＡＩですが、システムを作り出したのは『ReliеF』です。つまり、トライメント計画は現在の公社『LieF』はもちろん、『ReliеF』を開発した研究機関も関わっている大規模な計画なんでしょう」

「……ふむ」

ももが両腕を組みゆっくり息を吸い込む。

「『ReliеF』を使える機関は一つですし、そこが動いてるとなればその周辺の事業も関わっていると考えてもいいです。……まあ、あの先生がいるということは十中八九、医療機関も絡んでいるでしょうねぇ」

夏奈が首をかしげる。
「あの先生って、三国先生？」
ももが夏奈に視線を向けてから前を向く。
「とにかく、トライメント計画には間違いなく膨大な資金が投入されています。ということは同時に達成すべき大きな目標があり、その一環として、第二地区では機密性の高い研究開発をしていると考えるのが妥当でしょうか。計画の背景もしっかりしていますし、夏ごろに開放すると言うなら、それを待っても問題ないでしょう」
流花、口に手を当てる。
「……さすがだな」
ももは少し頬を赤らめて視線を泳がせた。
「いえいえ、トトがすごいのです」
「いえいえ、ももがすごいのです」
トトが復唱するようにこたえる。
「みんなすごい!!」
夏奈がずいっと、もものほうに身を乗り出す。
「よくわかんなかったから今言ったことノートに書いて!!」
ももが眉間にしわを寄せ、呆れ顔を夏奈に向ける。
そのももに、夏奈が笑顔でノートとペンを差し出す。

しぶしぶ受け取ったももは、ノートを開いてペンを動かし始めた。
「……まあ、姉がどうしてるかはわからないが、少し安心したよ。元々、あたしもこの計画自体には興味があってね……というよりは、それこそがここにきた理由の一つというか。できることならこの機会を利用して、計画の関係組織に再就職できればと思っていたんでね」
「なるほどですねぇ」
ノートにペンを走らせながら、ももがうなずいた。
「チャンスをものにするコツを教えてください」
夏奈の笑みが、流花に向けられる。
流花が首をかしげた。
「ん、どういうことだ？」
夏奈が両手を床について、流花の目の前まで顔を寄せる。
「私も再就職したい!!」
流花が微笑む。
「ああ、そういうこと」
「うん！」
唇をぴったり閉じて微笑んだ夏奈がうなずく。
流花は目の前の夏奈の顔をしばらく眺めた。
ももは黙々とペンを走らせている。
「えっ？」「えっ？」

ネー！」ネー！」
ももと流花が同時に声を上げた。
二人が一斉に、夏奈に視線を向ける。
そのあとで、ももと流花は互いの顔を見やった。
ももがゆっくり、夏奈のほうに視線を戻す。
「夏奈、就職していたんですか……!?」
夏奈がうなずく。
「なんとかっていう企業の広報部にいたんだけれど、クビになった!!」
「…………」「…………」
ももと流花がゆっくり顔を見合わせる。
「詳しい話、聞いてみたいけど聞きたくないな……」
流花はそうつぶやいてから、ももの方に視線を向けた。
ももは真剣な表情を浮かべて、俯いている。
「皆さん、色々な事情があるんですね……」
「……………」
トトがディスプレイの中からももを見上げていた。
「理由はどうであれ、今となっては、ももちゃんを計画に追いやった両親に少し感謝ですね……」
ももが呟くように言った。

「ね！　授業は無料で、お金まで貰えるし、最高だよね‼」
流花とももが、ポカンと口を開けて夏奈を見つめた。
「ね！」
夏奈の顔を見つめたまま、ももが笑った。
「そうですね」
夏奈もニッコリと微笑んだ。

数日後。
教室では、席に着いた生徒たちが、壇上の三国のほうへ顔を向けていた。
「――と、グループでの課題共有は自由だが、最終的な発表では各個人ごとに行ってもらう」
教室全体をゆっくり見渡したあと、三国は視線をミリャのほうに向けた。
「もちろん例外もあるが、基本的にはそのように考えてほしい。説明は以上だ。早速始めてほしい」
教室にざわめきがひろがり、まばらに生徒たちが立ち上がりグループを作る。

つを作る。
　ミリャの周囲には、司と理人、ももの三人が集まった。
「さて、僕らはいつも通り各々始めちゃいますか」
「ですねっ」
「僕とももちゃんは、予め走らせておいたプログラムのチェックと、検証ってとこかな」
　司がショルダーバッグを肩にかけた。
「じゃあ俺、先に図書館の資料室行ってくるよ。ちょっと調べたいことがあるんだ」
「おっけい。ミリャちゃんは？」
　ミリャが理人のほうに視線を向ける。
「どうする？」
　ミリャが理人から司に視線を移してから司を指さし、また視線を理人に戻す。
「うん。じゃあ、司よろしく」
「むむむ。ミリャは本当、司にベタベタですね」
「……（こく）」
「むむむむむっ!!」
　ももがミリャをキッと睨む。
「あはは……」

司がミリャに顔を向ける。
ミリャはまっすぐ司を見上げていた。
「それじゃ、またあとで」
司とミリャが図書館を横切り、資料室と書かれたコーナーに向かう。
司は手に持っていた鍵でロックを解除し、扉をスライドさせる。
「ほぼ一人用だな……」
そうつぶやいてから、司がミリャを見下ろす。
「俺、ここでちょっと調べものをするけど、ミリャちゃんはどうする？」
ミリャは司を見上げたままうなずき、検索端末の前の長いすに腰かけた。
司は薄く微笑み、長いすの隣半分に座った。
目の前の端末に触れると画面のバックライトが点灯し、検索窓が表示される。
「えっと、ゲーム……エキス、パート……システムっと」
[illegible]

司が現れた画面をスライドさせて、検索結果を順番に眺めていく。
ミリャも画面をじっと見つめていた。
「ふむ」
司は鞄からタブレットを取り出し、検索端末の横にセットして接続させる。
画面を切り替えながら、検索結果をタブレットに共有していく。
「結構あるな……」
司が隣のミリャを見下ろす。
ミリャは黙ったまま目の前の端末を見つめている。
「読むのはあとでいいか」
タブレットの画面がひかり、検索端末から小さな電子音がなる。
『読み込み完了』の文字が、それぞれの画面に表示されていた。
司はタブレットの接続をはずし、画面を操作して読み込んだ内容を確認した。
ミリャはまだ、検索端末を眺めている。
「調べたいことがあれば使っていいよ」
ミリャが司を見上げる。
「……（こく）」
うなずいてから手を伸ばし、画面に指を触れる。
司が隣からミリャの動作を見守っている。

ミリャが検索窓にワードを打ち込み、検索結果が表示される。
『遺伝アルゴリズムの研究員――ニューラルネットの新たな理論を発表。業界に更なる飛躍的な進歩を――』
　司は切り替わる画面をじっと見つめ、追えるだけ文字を追っていく。
『――東研機関大学准教授　三国義貴――神経内科学のエキスパートシステムを機械学習アルゴリズムと独自研究との統合により開発』
「…………」
　画面には、三国と、数名の研究員が写された写真が表示されている。
「これって……三国先生、だよね……」
　ミリャは司の問いにはこたえず、画面をじっと見つめている。
　そのあと、自分の鞄からタブレットを取り出し、司と同じように端末に接続した。
　ミリャが画面のボタンを押し、検索結果がタブレットに取り込まれ始める。
「…………」
　画面が次々と切り替わる。
『――発に大きく貢献したのは、現代社会に広く用いられるようになった、[illegible]が

なった、Kellerか――』
　司は切り替わる画面を見つめながら腕を組んだ。
『――ステムが現在の特別支援学校の礎となっている。これにより、各専門を取り扱う機関がより精――』
　やがてタブレットの画面が点灯し、端末から電子音が鳴る。
　ミリャはタブレットを接続ケーブルから外して鞄にしまった。
　それから司を見上げる。
「……（こく）」
「……うん」
　ミリャに見上げられた司がうなずく。
「じゃ、行こうか」

　図書館の長テーブルに、日向子と流花が並んで座っている。
　流花が片腕を頭のうしろに回し、反対の手で肘を掴み、背筋を伸ばした。
「んん……っ」
　伸びをしてから、流花が日向子のほうに顔を向ける。
　流花の視線に気付いた日向子が手を止めて顔をあげた。

「一区切りついた？」
流花は軽く肩をすくめる。
「とりあえずね。日向子は順調？」
「うん。実例が多いこともあって迷うことはなさそう」
日向子の視線が手元のタブレットに移る。
「その一つ一つを、このタブレットで確認できるしね」
「そうか」
日向子の手元のタブレットをぼんやり見つめながら流花が言った。
「教員、少し前までは本当に大変だったみたいだからな」
「そうみたいだね……。あたしが大学にあがった頃が、例の特別支援学校が一般的に認知され始めたくらいでね。地元の教育委員会も大きく変わって、その変化の調査が、一年次の課題で何回か出されてたよ」
「大館さん、学部はどこだったの？」
「法学部。当時は課題として出されたから調べただけで、自分から積極的に取り組んだわけじゃなかった」
「もしかして、それが……」
「たぶんね。この計画は恐らく、その延長線上にあるものなんでしょうね」

「……そっか」
流花が日向子のほうに顔を向ける。
「だからチャンスなんじゃない？　教育関係に関しては、ここの運営は繋がりも多いだろうし、聞けることはたくさんあると思うよ」
「うん……」
日向子は前を向き、手元のタブレットにもう一度視線を向けた。
「まずは私が質問できるだけの知識を身につけないとだね」
苦笑いを浮かべて日向子が言った。
流花がそれを見て微笑む。
「たしかに、質問できるようになったころには卒業していた、なんてことはよくある話だからね」
「うぅ……頑張ります」
苦しげに言ってから、日向子は視線を流花の前に広げられている資料に向けた。
「大舘さんが六法全書を持ち歩いていることには慣れたけど、今勉強している資格にも関係するものなの？」
「ああ、これ？」
流花が手元の六法全書を見下ろす。
「まあ、癖みたいなものだよ。資格の勉強にはあまり関係ないけど、技術の専門的な取り扱いを勉強する上で、ふと疑問が浮かぶこともあ

るから。問題文を見て、もし、この技術が実用化された場合、社会には如何なる法が必要になるかを考えるんだよね」
　六法全書の表紙に手を触れながら、流花が言った。
「そのとき浮かんだイメージを明確化するために、これを使ってる」
「ひえぇぇぇ……すごいぃ……」
　うわずったような声で呻いたあと、日向子がハッと目を見開く。
「あれ、それじゃあ、大舘さんはやっぱり、また法務関係の仕事に就くの？」
　流花がキョトンと日向子を見つめる。
「……いや、わからない。少なくとも、法曹は途中で辞めたからね」
「法曹？」
「法律を扱う専門職のこと。裁判官、検察官、弁護士とかだよ」
「な、なるほど……」
　流花は手元の六法全書に視線を戻す。
「ただ、法学を学ぶと、法律に則って物事を判断する法的思考を身につけることができる。法を意識して取得選択ができる能力はどこに行っても重宝されるから、選択肢は意外と広いよ」
「それは、確かにそうだね……」
　流花が口元に微笑みを浮かべてうなずき、そのまま体をひねって後

ろを振り返った。
「それで、いつまでそこに突っ立ってるんだ、新田くん」
「えっ？」
日向子も流花の視線を追いかけた。
二人の後方に、司とミリャが立っているのが日向子にも見えた。
「あっ、ミリャちゃん……」
司がぽりぽりと後頭部をかく。
「いや、真面目な話をしてるようだったから、話しかけるタイミングを見失って……」
流花が首をかしげる。
「それで？」
「あ、ううん。特に用があった訳じゃないんだけど、二人を見かけたから声かけてみようと思って」
「そういうこと」
流花と日向子は、机に背を向けるようにして司とミリャのほうに体を向けた。
「勝手に話を聞かせてもらっちゃったけど、実は俺も法学には興味があったりして」
「ああ、そんな気はしてた」
司が目を見開いて流花を見下ろす。

「え、そうなの？」
流花がうなずく。
「普通は退屈な固い話でも、新田くんはだいぶ掘り下げて聞いてくるきらいがあったからね」
「……そういうものか……」
指で顎をさすりながら、司がつぶやく。
「私も楽しいと思って聞いてるからね！」
日向子が慌てたように、声を張り上げて言った。
流花が苦笑する。
「うん、日向子が興味あるのはちゃんと伝わってるよ」
司の隣に立つミリャが、流花の資料をジッと見つめていた。
「ん、気になる？」
日向子がミリャにたずね、ミリャがうなずく。
司も、流花の資料のほうに目をやった。
「そっか。二人は選択授業、資格取得を選んだんだもんね」
「あ、そうだね」
司が日向子のほうに目を向ける。
「箒木さんはなんの資格をとるか決まってるの？」
日向子がうなずく。

それから口を開き、すぐに閉じる。
「私は、イタズラっぽく微笑み、人差し指を口に当てる。
「司はなにを選んだでしょう？」
司はポカンと日向子を見下ろして、微笑みながら腕を組んだ。
「うーん」
日向子が司を見上げる。
流花は身を少しうしろに倒して、日向子の後ろ手に手を回し、日向子が読んでいた本を司に見えるように立てた。
司がちらりと、その本の表紙に目を向ける。
「……教員免許？」
日向子が目を丸くする。
「えっ、どうしてわかったの⁉」
「箒木さんはわかりやすいからね」
「ええ〜うそだーっ」
日向子が勢いよく後ろを振り返る。
流花はすでに体勢を戻して、そっぽを向いていた。
「大舘さんでしょ！」
ゆっくりと日向子のほうを振り返り、流花は頬杖をついた。
「いいじゃん。あたしはお似合いだと思うよ」
「うん、思いのほかイメージにぴったりで、俺もちょっとびっくり」

日向子は俯き、視線の先で両手を組んだ。

「そ、そうかな……えへへ」

「……（こくこく）」

ミリャは日向子に向けてサムズアップする。

顔を上げた日向子がミリャに微笑みかけて、同じようにサムズアップを作った。

「と、邪魔してごめん。俺たちはももちゃん先生のところに戻るよ」

「おう。こちらこそ呼び止めて悪いね」

「いやいや。それじゃ、二人とも頑張って」

「新田くんとミリャちゃんもファイトだよ！」

ミリャが日向子に向けて、今度はＶサインを突き出す。

司は片手を上げて振り返りながら入口へ向かい、ミリャもそのあとを追ってとてとてと駆けていった。

・・・

自分の食事をのせたお盆を持った学生たちが、食堂をせわしなく行

き来する。
厨房の中からは活気ある声が飛び交っている。
定食をお盆にのせた司が四人掛けのテーブル席に座る。
その正面に理人が座り、司の隣にミリャが、理人の隣にももが座った。
「皆さん、野菜好きすぎじゃありませんか!?」
テーブルを見渡したももが叫ぶ。
「そうかな？」
「理人のそれはなんですか！」
「ヘルシーお膳」
「司は！」
「野菜炒め定食」
「ほら!!」
司が苦笑いを浮かべる。
「ももちゃんをいじめるための軽いテロ行為ですよ、これ。特に……」
ももがチラリと目の前に座ったミリャのお盆を見る。
野菜スティックに温野菜、ピクルスが並んでいた。
「なんですか、ミリャ、それは！！！　ウサギのエサですか！」
両手でピースを作り、目の前でチョキチョキするもも。

両手でピースを作り、目の前で

「ヒイイーーーッ。目が、目がイタイですうう」

「うーん、さすがベジタリアン。意外な天敵がここに」

ミリャは野菜スティックの入ったカップをももへ差し出す。

「うひゃーーーー！　やめてくださいっ、においだけでもうダメなんですから‼」

ミリャはキュウリのスティックをつまんでポリポリと食べる。

「こうなったら目隠しして食べるしかないですよ、もう！」

もも、両手で目を隠して口をあける。

「司ー？　ももちゃんのハンバーグ口にいれてくださーい」

司は少し口を開きながら苦笑いを浮かべた。

「鼻じゃなくて目を塞ぐんだ……」

そう言ったあと、もも前にあるハンバーグとミリャの前にある野菜スティックを交互に見る。

「あっ！　野菜スティック近づけても匂いでわかりますからね⁉　そしたらももちゃんのフラグが折れますからね⁉」

理人が自分の豆腐ハンバーグをももの口へ近づける。

「ははん！　野菜嫌いを甘く見ないでほしいですね！　中にたまねぎが入ってることは匂いでわかるんですよ‼」

目を隠した両手を外して、ももが両腕を広げる。

「うへー、マジで野菜だめなんだね」
「ももちゃんは野菜抜きって、食堂の人も覚えてるくらいだしね」
「もう、死活問題なんですから、ももちゃんで遊ばないでください」
「栄養偏ると成長しないぞ、ももすけ」
「ふふん。そーゆー需要に答えてるんです、胸なんてあっても肩こりの原因になるだけですから。流花なんて胸にメロンぶら下げてるようなものですよ。ヒェーーー恐ろしいっ」
「メロンか……」
「あ！　司、今想像しましたね!?　したでしょう!?」
「うん。メロンもウリ科だから、ももちゃん食べられないのかなって」
「ももちゃんのことを想う素晴らしい返しですね。ご褒美にハンバーグちょっとあげます」
　ももが切り分けたハンバーグをフォークで刺し、持ち上げる。
　すかさず、ミリャがそのハンバーグに食いつく。
「おわーーー！　ダメですよ、ミリャ。等価交換なんですから！」
　ミリャはもぐもぐとハンバーグを頬張りながら、人参のスティックを一本差し出した。
「それはいりません！」
　理人が豆腐ハンバーグをココに運ぶ。

理人は豆腐ハンバーグを口に運ぶ
「いやあ、賑やかだねえ」
「むしろ、ご飯時は静かになるよね、理人」
「よく噛むから、食べてる間は喋る隙があんまないんだよね」
「そういうところは健康志向なんだな」
「いや、一人だと面倒だから、生きるのに必要なければ食べないんだけどね。不思議なもんだよ。みんなで食べるっていうのは」
司が微笑む。
「そうだね」

教室の机を四つ繋げてつくられた即席の作業台に、パソコンやメモ用紙が乱雑に重ねられている。
司とミリャは作業台にタブレットをおいて画面を見つめている。二人だけの教室で、タブレットの画面を叩く音だけが教室に響いていた。
「ふむ……」
司がタブレットから視線をあげ、ノートパソコンを手前に引き寄せてマウスを操作する。

慣れた手つきでキーボードをタイプし、エンターキーを打つと電子音が鳴り、画面が点滅した。
「おお、できた」
司がマウスで画面をクリックすると、画面の点滅が止まった。
体を椅子の背もたれに預けると、ギギギと金属が軋む音が鳴った。
「ふぅ……」
腕をあげて背筋を伸ばし、ミリャのほうに顔を向ける。
ミリャはタブレットの画面をまっすぐ見下ろしていた。
その横顔をしばらく眺めてから司は椅子ごとミリャに近づきタブレットを覗きこんだ。
「ん……？」
ミリャの手元のタブレットは、点滅するように画面が次々に切り替わっている。
「壊れてるのか？」
司がタブレットから視線を上げてミリャの横顔を見る。
ミリャは真っ直ぐタブレットを見下ろしている。
「……ミリャ？」
ゆっくり伸ばした司の手がミリャの肩に触れる。
「!!」
ミリャの体がビクリと跳ねて、勢いよく司の方を振り返る。

「あっ、ごめん。なんかタブレットの表示がおかしかったから……あれ」

司が視線をミリャの手元に移し、タブレットの画面を見ると、点滅は止まっていた。

「？」

画面には『ニューロトロフィンと特異的受容体の関係』と書かれたページが表示されている。

「あ、いや、ごめん……。なんでもなかったみたい」

ミリャはしばらく司を見上げてからタブレットの電源を落とした。

そのあと、司のノートパソコンを手元に寄せる。

「ん？」

ミリャがマウスを手に取り、慣れた手つきで操作して画面をクリックする。

画面が点滅して動き始める。

「一応そこまではできたんだ。まだショボいけど、自分で作ったものが動くと、結構嬉しいものだね」

「……………」

ミリャは画面を見つめたまま、マウスのクリックを続ける。

その度に、画面が点滅した。

司は隣からミリャの様子を眺めている。
「おつかれ一。お、できた感じ？」
するとに教室の扉が開き、理人とももが連れ立って教室に入ってきた。
理人が軽く手をあげながら作業机に歩みよる。
のんびり歩く理人をももが足早に追い越し、空いた椅子を掴むと司とミリャの間に無理矢理押し込んだ。
「よいしょっ」
そこに身を滑り込ませて、前のめりになって二人の間にあったノ一トパソコンを覗きこむ。
「ほうほう。結構進みましたねっ」
理人が三人の背後に立ち、中腰になって画面を覗く。
「ほんとだ。やるじゃん、司」
「……なんか照れるな」
「面白くなってきたね」
「ミリャは何してたんですか？」
ももが机に置かれたミリャのタブレットに手をのばす。
「！」
タブレットの電源を付け、ももがじっくり画面を眺める。
「まうまうまう

「はぅはぅはぅ……。ん？？？？？？」
ミリャは目をすわらせて、ももの両脇に手を差し入れた。
「これは一体いいいいいいいぃぃぃぃいいいいいいっ!?　いいっひひひひいいいっ」
ももの両脇で、ミリャの手がわしゃわしゃとうごめく。
「ひ――――っ」
タブレットを机の上に放り、ももがミリャから逃げる。
教室の角まで走り、肩で息をしながらももが振り返る。
「ななな、なんですかミリャ！」
口をポカンと開いた司と理人が、ミリャとももを交互に眺める。
ミリャがVサイン突き出した。
「ミリャちゃんはくすぐりうまいよね」
「うまいとかそういう次元じゃないですよ!!危く逝くところでした……！」
司が苦笑いを浮かべる。
ももがあがった息を整えながら、ミリャを見つめる。
ミリャはやや視線を逸らした。
「？」
ももが首をかしげた。
「さて、それじゃあ、そろそろ切り上げますか」

「そうだね」
ミリャもうなずき、司と理人、ミリャの三人が片付けを始める。
教室の角から、ももが呆けたようにその様子を眺めていた。
「ももちゃん、どうしたの？」
振り返った司が聞いた。
その声に、ハッとももが我に返る。
「あっ、いえ！」
作業台のほうに駆け寄り、ももが機材のコードを抜いていく。
片づけをしながら、ももはミリャの方を盗み見た。
ミリャは散らばったメモ用紙を束にまとめている。
「…………」

西日が差す廊下を四人が歩く。
「思ったより、既存のシステムがどれもしっかりしてましたね」
「うん。流石にあの辺は僕たちにはいじれないし、バージョンアップも難しいから助かった」
「すると、どこの部分から触っていきますか？」
「うーん、[illegible]」
[illegible]

う一ん。ベ一スが殆どできちゃったからね……。早速機械学習のために可能な限りデ一タを集めていこう」
「既存のゲ一ムソフトから収集していく訳ですよね。物を用意する方が大変そうです」
「だねえ」
真剣な様子で話し合う理人とももが、司とミリャの前を歩く。
「なんていうか、普段の二人からは想像できない姿だよ」
ミリャが歩きながら、隣の司の顔を見上げる。
司もミリャのほうに軽く視線を向ける。
「……（こく）」
ミリャのうなずきに微笑みを返して、司はまた前を向き、理人とももの議論に耳をかたむける。
「……」
遠くからピアノの音が聞こえ、司が目を細めた。
徐々に、司の歩く速度が落ちていき、ゆっくり立ち止まる。
微かな旋律に耳を巡らせ、音の方向を探ってそちらに振り向く。
「……………」
前を歩く理人とももは歩き続ける。
ミリャが立ち止まり、司のほうを振り向く。
司が前を向き、口を開く。

「みんな、ちょっとごめん。先に帰っててもらえるかな。俺、忘れ物を思い出した！」
　その声に理人とももが振り返る。
「お、りょーかいっ」
「あっ、はい。いってらっしゃいです！」
「みんな、お疲れさまっ」
　手を上げながら踵を返し、足早に廊下を進んでいく。
　ミリャは司の背中をじっと見つめている。
　そして、その背中を追いかけた。
「あら」
　理人とももが二人の背中を見つめる。
「ミリャちゃんは司かな」
「でしょうね……」
　二人の背中をぼんやりと見送ったあと、ももは理人を見上げた。
「あの、理人」
「ん？」
「えっと、ももちゃんも……その―……」
　ももは俯きながら、小さな声で言った。
　理人が微笑みを浮かべる。

「どうぞどうぞ」
ももがもう一度理人を見上げる。
「いやあ、青春だねぇ……」
呆けたように口を開けたあと、ももの頬がすこし紅くなった。
「あ、ありがとうございます」
深くお礼をしてからもう一度まっすぐ理人を見上げ、右手を額に当ててももが敬礼する。
「では、ちょっと行ってきます！」
「あいよ～、いってらっさい」
ももが誰もいなくなった廊下を走り出す。
微笑んだ理人が、ももの背中を見送った。

音楽室と書かれた教室の前で司が立ち止まる。
中からはぎこちなくピアノを打鍵する音が聞こえてくる。
「…………」
ゆっくりと扉を開けた司が、音楽室の様子をうかがう。
グランドピアノのほうに視線を投げた司が軽く目を見開く。
「えっ、に、新田くん!?」

鍵盤に向かって座っていた日向子が目を見開き、手で口押さえる。
慌てて立ち上がり、目の前の鍵盤を見下ろして、おずおずと司に目を向けた。
「ど、どうしてここに？」
司は脱力して口を開いたまま呆然と日向子のほうを見ていた。
焦点がゆっくりと日向子に合っていき、ハッと我にかえる。
「あ、いや。……ピアノの音が聞こえたから、誰が弾いてるのか気になって」
司は日向子から視線を逸らし、ぽりぽりと後頭部をかく。
しばらく床の一点を見つめてから、もう一度顔を上げて日向子に視線を移す。
「箒木さん、よく弾いてるの？」
司が一歩、音楽室の中に踏み出し、日向子のほうに歩み寄っていく。
「ううん、そんな、人に聞かせられる状態では、全然なくて……その。教員になるのに一応、ピアノを触れるくらいにはなっておこうと……思いまして……。だからその、全然下手で！　ごめんねっ」
司がグランドピアノの天板に手を触れながら微笑む。
「そんな、謝らなくても」
「……

「う、うんっ」
「なんか、曲名はわからないけど、聞いたことある曲だった」
日向子が譜面台の楽譜を手にとり、司に見えるよう両手で掲げる。
「えっと、シューマンのトロイメライ。これは音を削った楽譜で、本当に簡単なものなんだけど……」
「でも上手に弾けてたよ」
日向子が頬を赤らめてうつむく。
「いやあ、ほんと、ごめんなさいって感じで……」
「あはは、箒木さんらしいね」
司が一歩日向子に近づき、鍵盤に指を触れる。
日向子が少し目を見開いて、その指先を眺め、顔を上げて司を見つめる。
「新田くんは、ピアノ、弾けるの？」
司は視線だけを日向子に向ける。
「……………」
鍵盤に手をおいたまま、司は動作を止める。
「新田くん？」
首をかしげた日向子が司の顔をのぞきこんだ。
司が苦笑いを浮かべて、鍵盤から手を離す。
「弾いてみようと思ったんだけど、思い出せなかった」

「ほえ、練習してたことはあるんだ？」
「うーん……」
司は苦笑いを浮かべて曖昧に返事をした。
日向子は司の表情を見つめながら自分の手首をさすった。
「まあ、ずっと弾いてないと忘れちゃうよね」
「うん……っ、なんか練習中邪魔してごめん」
司が一歩後退して、日向子を正面から見つめる。
「俺はお先に失礼するよ」
「ううん、新田君も自由学習、頑張ってね」
「うん、ありがとう。それじゃ」
軽く手を上げて、司が踵を返す。
入口まで歩いていき振り返ると、鍵盤の前に立っている日向子が小さく手を振った。
司も微笑んで手を振りかえし、扉を開いて音楽室をあとにした。

ミリャが、司を見上げている。
「…………」

扉を閉めた司が静かに息をつく。
「ミリャちゃんか」
「……（こく）」
司はしばらく、自分をまっすぐ見上げるミリャの視線を見下ろしていた。
「ああ。箒木さんなら、音楽室にいるよ」
そう言って一歩横にずれる。
ミリャは目の前の扉をしばらく眺めてから、もう一度司を見上げてうなずいた。
そのあと一歩踏み出して、扉に手をかける。
司がその様子を見守る。
「それじゃ、またね。ミリャちゃん」
そう言った司が廊下のほうに振り返り、そのまま寮に向かって歩き出す。
ミリャは扉に手をかけたまま司の背中を見つめた。
しばらくそうしてから、目の前の扉を挟んで反対側の廊下を振り返る。
さっと影が動き、遅れてなびいたツインテールが隠れた。
「……」
ミリャはゆっくり前を向き、音楽室の扉を開ける。

音楽室の中から聞こえる日向子の驚きの声が廊下に響く。
ミリャが音楽室の中に入り、扉が閉まる。
「…………」
廊下の角から、ももがゆっくりと顔を出す。
ももの視線の先には、寮に向かって歩く司の後ろ姿があった。

桜の花びらが風に舞い、中庭に降り注ぐ。
司が歩を緩めて見上げる。
何枚もの花びらが司の瞳に映った。
目を細めて花びらを見つめたあと俯き、司はため息をついた。
「帰るか……」
司がつぶやいたとき、背後からガコンと大きな音が鳴った。
司が振り返ると、そこには自販機から飲み物を取り出すももの姿があった。
立ち上がったももが司のほうを振り返る。
「つかさ一っ。いっきますよ一！」
そう言って、手に持ったペットボトルを頭上に掲げる。

「えっ？」
呆気にとられる司をよそに、ももはペットボトルを振りかぶる。
「えいっ」
ペットボトルがももの手を離れて宙に放たれる。
「ちょっ」
司が大きく目を見開く。
手を伸ばし、弧を描いて落下してくるペットボトルを受け止める。
大きく息を吐き、ももを見る。
「ナイスキャッチです、司！」
楽しそうに微笑んでいるももが司に歩み寄る。
「司はやっぱり反射神経がいいですねぇ」
ももが司の前で立ち止まる。
司がももを見下ろす。
「唐突だったから結構危なかったよ」
そう言いながら司が手に持ったペットボトルをももに差し出す。
ももは差し出された司の手を見下ろし、そのあとでもう一度司を見上げる。
「それは司にあげます」
「え？　でも……」
司の視線が泳ぐ。

司の補給が済

ももは自分の手に持っていたオレンジジュースのペットボトルを掲げた。
反対の手で近くのテーブルを指さす。
「司、そこで一緒にお話ししませんか？」

中庭の四人掛けのテーブルの長いすに、司とももが隣り合って座っていた。
「……」
ももが、俯いた司の横顔をのぞきこむ。
「あれ、もしかして、お茶じゃないほうがよかったですか？」
「ああ、ううん」
司が首を振り、手元のお茶を眺める。
「ありがたくいただくよ」
プラスチックの蓋をまわし、ペットボトルをあおる。
ももはその様子を眺めてから、同じように自分のオレンジジュースの蓋を開けて口を付けた。
司がその様子を横目で盗み見る。

「ももちゃん、まだ帰ってなかったんだね」
「はい。……司のあとをつけていたので」
「え？」
司は顔をもものほうに向けた。
ももも、司の視線を見つめ返した。
「どうして？」
「さあ、どうしてでしょうねえ？」
ももがニコリと微笑む。
眉をひそめた司が首をかしげた。
「…………」
「司」
微笑みを消したももが、まっすぐ司を見上げる。
「何か探しているのでしたら、ももちゃんが手伝いますよ」
「……。……探してる……」
司の呟きが、わずかに空いた口の隙間から漏れ出た。
そのまま目を伏せて、焦点の合っていない視線をテーブルに落とす。
「……俺が？」
「あっ、ちなみに、ももちゃんは幽霊とか信じないので。起こる物事に偶然はなく、世の中には法則がありますからね。ももちゃんなら、

司の謎をちゃんと解明してみせますよ」
「……」
司はもう一度、目を丸くしてももの顔を見つめた。
「あ、もしかして、今日の忘れ物のこと？」
その言葉に、今度はももが目を丸くする。
「えっと……」
ももの視線が泳ぐ。
「ごめん、あれは咄嗟に口をついた嘘というか……。ピアノの演奏が気になって見に行ってたんだ。誰が弾いてるのか、ちょっと気になって」
「……。その、気になっているかたには、お会いできましたか？」
「ん……」
ももがまっすぐ司を見つめる。
目を細めていた司が、ゆっくり目を見開く。
「……あれ」
司はももから視線を逸らして俯いた。
「俺……なにが気になってたんだっけ……」
「司……」

「あ、ごめんっ。今思い出すから……！」
額に手を当て、司が目を閉じる。
眉間には僅かにしわが寄っていた。
「……」
ももが呆然と、司の様子を眺めた。
司をのぞきこむように上目遣いになったももが、口を開く。
「……その、アイという女の子を探していたのではないですか？」
「……アイ？」
額に手を当てたまま、司の動作が止まる。
「司……？」
司は口に手をあてて、その名前の感触を確かめるように何度もつぶやいていた。
「……あ、あの、変なことを尋ねるようなんですけど」
司がももに顔を向ける。
「あ、ごめん。なにかな」
「……その、司……ですよね？」
司は目を丸くして首をかしげた。
うなずきながら司がこたえる。
「うん、司だよ」
「

「……」
ももは司から視線を逸らして、口に手をあてて黙り込んだ。
「あっ。もしかして、白い髪の女の子のこと？」
「そ、そうです!!　その女性です！」
目を見開いたももが叫んだ。
「ああ一。うん、思い出した。ももちゃん、彼女と知り合いなの？」
「えっ……。あっ、えっと……」
ももはまた顔をそむけて視線を泳がせた。
「……その、この間、二人が一緒にいるところを見てしまったといいますか……。……聞いてしまったといいますか……」
「ああ、そうだったんだ」
司がうんうんとうなずく。
「は、はい」
司は首に手を添えて、頭を横にかたむけた。
「いや、最近調子が悪いみたいで……まいったな」
「体調がすぐれないとかですか？」
「体は健康だと思うんだけどね」
司は困ったような苦笑いを浮かべた。
「……実はさ。俺、脳の病気で記憶が度々飛んでるみたいなんだよね」

「脳の病気……」
ももが口に手をあてて俯いた。
そしてすぐに司に視線を戻す。
「えっ？」
ももが大きく目を見開いた。
「あ、あんまり気にしないでね。隠してるわけじゃないけれど、気を遣わせても申し訳ないからさ。実はトライメント計画に参加した理由も、微妙に思い出せなくてさ……」
司は顔を上に向けて、桜の花びらを眺めた。
「まあ、こういう病気だから、自分にできる仕事を探すため、とかなんだろうけど」
ももが眉をひそめて司の横顔を見つめる。
司が顔をおろして、ももを見つめ返して微笑んだ。
「病気については気にしないで。むしろ、自由学習で迷惑を掛けてないといいんだけど」
ももがまた目を見開く。
「いいえっ、そんなことは全然ないですよっ」
「よかった」
微笑んだまま、司がうなずいた。
「料理がつかれるときもクラスの皆しなこま迷惑がなかった人、俺ご

私自だれだれそと言もクラスのみんなにに近いななかったし、俺た
け浮いてるよな一って。だから、声を掛けてもらえて嬉しかったし、
尊敬できる二人に教われて、俺も頑張らなくちゃなって」
「そ、そんな……ソンケイだなんて……」
「雲の上の存在だった人が目の前にいるんだから、緊張しちゃうよ」
　ももが頬を赤らめて俯く。
「も、もう、お世辞でも司に言われると恥ずかしいのでやめてくださいっ」
　そう言いながら、ももが司の肩当たり優しく押した。
「本当に思ってるよ」
「だから……」
　ももが俯き、二人の間に沈黙が流れる。
　しばらくして、ももが上目遣いに司をのぞきこむ。
「……その、病気のことは誰にも言っていないんですか？」
「うん、そうだね。まあ、誰かに話したこと自体を忘れてるのかもしれないけれど」
「………………」
　司がゆっくり、桜の花びらを見上げる。
「忘れたい記憶ほど忘れられなかったりするから、過去にとらわれないで前を向けるという意味では、いい面もあるのかな……」

ももが口を小さく開けたまま、司の横顔を見つめる。
司がゆっくりもものほうに顔を向けて、微笑む。
「と、俺は思ってるけどね」
今度はももがゆっくり前を向き、俯いて自分の手元を見つめた。
「……強いんですね」
前を向いた司が、薄く微笑んだまま目を細める。
「向き合うべき弱さを覚えていないだけだよ」
ももはうつむいたまま手をぎゅっと握る。
「……すみません、こんな話をさせるつもりではなかったのに」
「心配して、声をかけてくれたんだよね」
「……」
「ありがとう。ももちゃんは優しいね」
「…………」
ももは司に顔を向けて、すぐにまたうつむいて自分の足に置いた二つの握りこぶしを見つめた。
眉間にしわをよせ、口元がゆがむ。
「なにも……役に立てていません」
「そんなことないよ。おかげで忘れていた『探し物』にも気づけたし」

司が前に手を伸ばし、落ちてきた花びらをてのひらで受け止める。
「自分のことを振り返る、いい機会をもらえた」
掴んだ花びらを、ももに差しだす。
ももはそれを、手のひらで受け止めて、しばらく見つめていた。
「話を聞いてくれて、本当にありがとうね」
もも、が顔を上げて、司を見つめる。
司がももに微笑んだ。

部屋の扉が開き、ももが部屋に入ってくる。
「ただいまです」
「おかえり」
机に向かって作業していた流花が、顔をあげずに言った。
ももが中央のテ一ブル前まで歩いていき、脱力したように座る。
どさりと大きな音がした。
そのままテ一ブルに突っ伏す。
流花がゆっくり振り返る。
「…………」
流花はしばらくももの背中を眺めたあと、また自分の机に向き直っ

た。
「どうだい、普通の学園生活は」
ももの体がピクリと動く。
「……。まあ、ぼちぼちですね」
つっぷしたままのももが、くぐもった声でこたえる。
「微妙な反応だな」
頬杖をついて手元のノートを眺めながら流花が言った。
「…………。もしかして、この学園そのものが普通ではないのでは」
「おっ」
流花がももへ振り返る。
机につっぷしたままの背中に顔を向ける。
「気づいたか」
「……」
顔を上げたももが流花を見る。
それから体を起こし、体ごと流花のほうに向きなおる。
「なにか言いたそうですね？」
「いや、なに」
流花が背もたれに腕をおいて体重を預けた。
「ももは『普通の学園生活』[illegible]

「ももは、『普通の学園生活』が送りたいんじゃなくて――。『天才研究者』という肩の重荷をおろしたいだけなんじゃないかと思ってね」

　ももが口を真一文字に閉じて眉間にしわを寄せる。

「このトライメント計画は、多方面における調査テストを踏まえた大規模な研究だ」

　ももがジトっとした目を流花に向ける。

「……と、ももは言った。本当はそれが気になっているのに、気にしてしまっている自分が嫌なんじゃないか？」

「……なにを言い出すかと思えば」

　前を向いて、目を伏せる。

「そんなこと、わかっていますよ」

　目を伏せたまま、ももは小さくため息をついた。

「……これは、『普通の学園生活』とはなんなのかという、ももちゃんなりの研究なんですよ」

「…………」

「……ただ、みなさんが思った以上にやる気で……一生懸命で……」

　俯いたままももが、つぶやくように言葉を続ける。

「付け入る隙がないというか……遊んでる空気じゃないというか……」

「ももはそういうの、気にしないタイプだと思ってたけど」
「……。計画の空気にでも当てられたんですかね」
流花はこたえずに両腕を組んだ。
しばらく沈黙が流れたあとで、流花が口を開く。
「確かに、この学園のモラルは異様にしっかりしている」
ももがふたたび、ため息をつく。
「皆さん、もう大人ですしねえ」
流花が天井を見上げ、視線を漂わせる。
「それもあるんだが……例えば社会人が集まってる企業であっても、皆がこれだけ同じ方向を向いている環境はなかなかない」
流花が口元に手をあてる。
「トライメント計画はつまり……事前準備が異様なまでに完璧だということだ」
「……その事前準備ってこの場合、『人選』ってことになりますけど」
流花がうなずく。
「大学なら入試試験で、企業なら募集要項と面接で人選を行う。この計画の場合、個々の能力というよりは、関係性を意識して人選しているように感じる。……学校というよりは、企業に近い環境なのかもしれない

れない」
「……ふむ」
「企業の目的は、顧客を想像して社会に価値を提供することだ。つまり、あたしたちに求められているのは、学生の本分ではなく、計画の目的に準じた結果なんだよ。政治的ではあるが、合理的だ」
「つまり、普通の学園生活なんて送っている場合ではないというわけですね」
「……別に、真面目にやれといってるわけじゃないぞ」
「わかってますよ」
流花からふいと顔を逸らし、ももが前を向く。
「というか、なんなんですか。流花はももちゃんの古傷をえぐって楽しむドSなんですか？」
流花がほほをぽりぽりとかく。
「まあ、お節介焼きなのは認めるけど……」
言葉をとめた流花が目を伏せる。
「いや……悪かったよ」
「…………」
少し流花のほうに顔を向け、横目で盗み見てから、大げさに顔をそむける。
そのあとでまた、ももは深いため息をついた。

「ももちゃん、明日は朝から出かけてきます」
「……ん、りょーかい」
「流花は？」
流花が視線だけをももに向ける。
「いつも通り、勉強だな」
「ですよね」
ため息まじりに相槌をうちながら、ももが鞄からタブレットを取り出す。
　テーブルにおいて電源を付けると、画面のバックライトが点灯した。
「トト、ちょっと島の状況レポートをまとめます」
ちょこんと座っていたトトがハッとして立ち上がる。
「なにか調査でもするんですか？」
ももがうなずく。
トトがぽかんと目を丸くしてから微笑んだ。
「はいっ、わかりましたっ」
ももはじっと画面のももを見下ろしていた。
トトが嬉しそうに動き回る様子が映し出されている。
しばらくそれを眺めてから、ももは目を伏せた。

「……やるだけやってから考えますか」
部屋の照明が消え、ノートパソコンのバックライトだけが司を照らす。
天板に手をかけて閉じると部屋の灯りが全てなくなった。
立ち上がった司が窓の外を見上げる。
満天の星空と半月が司の瞳に写る。
しばらく夜空を眺めたあと、司はカーテンを閉じた。
司が廊下からロビーに出る。
出口に向かって歩く司の視界に、中央の机に向かって座っているミリャが入った。
司に気づいたミリャが立ち上がり、司は歩を緩めて立ち止まった。
ミリャがとてとてと司に駆け寄る。
「おはよう、ミリャちゃん」
「……（こく）」
「朝からどうしたの？　こんなところで」
ミリャは司を見上げたまま、両手を振って走る動作を見せた。
「？」

司はその動作を見ながら、口に手を当て首をかしげた。
「あ、もしかしてランニングのこと？」
「……（こくこく）」
司を見上げるミリャがうなずく。
司は薄く微笑んだ。
「そうだね、久しぶりに海まで走ろうか」
……朝の海岸を司とミリャが堤防から眺める。
静かな海岸を、一人のおばあさんが犬を連れて散歩していた。
司はぼんやりとその様子を見つめた。
そのあとで隣に顔を向けると、ミリャの姿がなくなっていた。
辺りを見渡すと、東の林に歩いていくミリャの背中が見えた。
司が目を見開く。
「……やっぱり、そうか」
静かに微笑んだ司が言った。
……木々が密集した獣道を、ミリャは慣れたように進んでいく。
司も黙々と、そのあとについて歩いた。
林を抜けると、ミリャと司の目の前に朽ち果てた廃墟が姿を現した。
荒々しく伸びる草花と木々に覆われた廃墟に向かって、ミリャが歩

き出す。

目の前を歩くミリャの背中を見つめながら、司が廃墟の中を歩く。

「……司はしばらく廃墟を見上げてから、ミリャのあとに続いた。

階段をのぼり、廊下を進み、部屋の前でミリャが立ち止まる。

水の滴る音と、風の流れる音が、扉の向こうから微かに聞こえた。

「……」

ミリャがドアの取っ手に手をかけ、扉を開ける。

部屋に漂う塵が、窓から差し込んだ光を浴びて光る。

開いた扉が風の流れを変え、塵が舞い上がる。

部屋に入った司が部屋を見渡す。

誰もいない部屋に置かれたグランドピアノの上で、司の視線は止まった。

司のあとから部屋に入ってきたミリャが、部屋の中をぐるりとまわる。

ベッドに手をふれ、シーツのしわを伸ばすように撫でる。

司はミリャを横目で眺めながら、グランドピアノに手を伸ばす。

「……」

光を反射するグランドピアノに指を触れる。

黒光りする天板をしばらく眺めてから司が振り返る。

部屋の外に出てゆくミリャの背中が司の視界に入った。

部屋の外に出てい[illegible]
司は踵を返してそのあとを追いかけた。
迷いない足取りのミリャを司が追いかける。
ミリャは廊下を左手に曲がり、どんどん進んでいく。
一番奥の部屋の前で立ち止まり、扉の取っ手に手を触れる。
そのまま静止したミリャを、司は数歩距離を開けて見守っていた。
俯いて自分の手元を見ていたミリャがゆっくり顔を上げ、取っ手を引いた。

「……」
ももの眼前に水平線がひろがる。
海からの潮風がももの髪の毛をゆらゆらとなびかせた。
ももが遠くを見つめたまま目を細める。
「色々な海を見てきましたが、これは特別ですね」
そう言ってももは体を後ろ手に引いた。
歩道へ体を引き、第二地区に続く道路の先に、ももが視線を向ける。
真っ暗なトンネルの奥を、じっと見つめる。

「……さて」
そうつぶやいて、背負った鞄に手を回してタブレットを取り出す。
「どうですか、トト」
画面内でトトが、折れ線グラフが表示されているウィンドウを真剣に見つめていた。
「……まあ、完全に専用通信ですね。プロトコルも独自のものです」
「ふむ……やっぱりそうですよね」
「恐らく、計画内で管理しているものは全てそうだと思いますね」
ももがタブレットから**顔**をあげて、もう一度トンネルを見つめる。
「一**応**、解析してアクセスすることは可能かもしれませんが、どうしますか？」
「…………」
黙ったまま暗闇を眺めたあと、ももが視線を手元に落とす。
「……いえ、止めておきましょう。見つかったら、トトを没収される可能性が高いので」
「たしかに。それはできれば避けたいですねぇ」
「……」
風が吹き、もものツインテールが**揺**れる。
顔をあげたももが、風を受けながら目を細める。
「自分のここを振り返る、いい機会。ここは、そういう場所

……自分のことを振り返る、いい機会。……ここは、そういう場所ですしね」
　ももが俯いて自分のてのひらを見つめる。
「……もも、大丈夫ですか……？」
　もう片方の手に持ったタブレットから、トトが心配そうにももを見上げる。
　ももは視線をトトに向けて、眉を下げたまま口元だけで微笑んだ。
「はい、大丈夫です」
「…………」
　ももが顔を上げ、水平線を眺める。
「ただ、どうしてなんでしょうね。止まるきっかけを見つけに来たのに、どうして心は許してくれないんでしょうか」
　潮風がふき、ももが目を細める。
「自分勝手だとわかっていても、普通からずれているとわかっていても、孤独な道だとわかっていても。思考は永遠とまわり続ける」
　顔を下げて、手元のトトに視線を移す。
「ひどい呪いですよね」
「……」
　トトが顔を伏せた。
「人間って、面倒くさいですね」

ももが目を丸くした。

そのあとで吹き出し、声を出して少し笑った。

「そうなんですよ、トト」

笑顔のままのももが顔をあげて、もう一度海を見つめる。

「……どうですか、人の感情というのは」

トトが顔を上げて、じっとももを見つめる。

「…………」

トトももももと同じように、困ったように微笑んだ。

「いろいろ、いっぱい、たくさんです」

微笑んだももが手元に視線を戻す。

「そうですね」

ミリャが扉を開けると、隙間から光が差して司を照らした。

司は目を細めて、開かれたドアの向こうを見つめた。

部屋には胸に手をあて、扉の入り口側を見つめるアイの姿があった。

「アイ」

アイは目を見開いて司をまっすぐ見つめた。

アイは目を見開いて司をまっすぐ見つめた。
「ど、どうして……」
司がアイを見つめる。
アイも司を見つめ返した。
「……っ」
アイが、司とミリャが立つ入り口側へ駆けてきた。
司とミリャはそれぞれ左右に一歩さがり、アイが通れる道を作る。
司とすれ違い様に、アイの口が微かに開く。
「ごめん、司」
つぶやくようにそう言って、アイは廊下を駆けていった。
その背中を、司とミリャは見つめていた。
「……」
司は部屋の中に視線を戻した。
窓からさす陽の光が白く輝いている。
窓に歩み寄り、司が外を見下ろす。
深い緑の森の向こうに水平線が見えた。
司は振り返り、部屋に置かれたベッドとグランドピアノを横目に入り口まで歩く。
入り口に立っていたミリャを見下ろして、司が微かに笑みを浮かべる。

「ミリャちゃん、行こうか」
……司とミリャが砂浜に座る。
ショルダーバッグを肩から外し、司が中からサンドイッチを取り出す。
二つ並んだサンドイッチの一つをミリャに差し出す。
ミリャはしげしげとサンドイッチを眺めてから受け取った。
二人が同時にサンドイッチをかじり、咀嚼する。
二人の他に誰もいない海岸に静かな風が吹き、ミリャの髪が乱れる。
波が寄せて返す音に、二人は耳をかたむけていた。
「俺が倒れて、廃墟で目覚めた日から、頭痛が急になくなったんだ」
海を眺めながら司が言った。
「この島にきてからあの日までの間には、何度か痛んでたのに」
ミリャが司の横顔を見つめる。
「同時に、自分の中のなにかが抜け落ちたような感覚があって――。でもそれがなんなのかは、よくわからなかった。今までずっと気になっていた彼女のことが、急に意識から消えていた。昨日、アイのことを指摘されて、いつの間にか色々なことを忘れてる自分に気づいたよ」
そこで言葉を止めて、司はサンドイッチをかじった。

そこで言葉を止めて、司はサンドイッチをかじった。
ゆっくり咀嚼し、飲み込んでから、また司が口を開く。
「記憶は確かにあるのに、その内容はぐちゃぐちゃで、整合性がない。記憶の中で俺は……、アイと、ピアノを演奏していた。だけど、アイはピアノは弾けないと言った。そして、あの時やってきた、長い白髪の彼女。……白い砂浜で、海を見つめる彼女の姿が印象に残っているんだ」
司が目を細める。
「俺は、真っ赤になった空を見た。血に染まった、赤黒い空だ」
自嘲気味に司がふっと、鼻で笑う。
「一体なにが正しいのか……まるでわからない」
手に残っていたサンドイッチのひとかけらを口に入れて、司が後ろ手に倒れて仰向けになる。
陽の光が強く差し、それを隠すように顔の上に手を掲げる。
目を細め、まぶしい光の中でミリャが立ち上がる様子が司に見えた。
ざくざくと、砂浜を歩く音が波の音に混じって届く。
司が上半身を起こしてミリャに目をやる。
ミリャは海に向かってゆっくり歩いていた。
司は手元の鞄を肩にかけて立ち上がる。

ミリャのあとを追ってゆっくり歩き、立ち止まった後ろ姿を見つめる。

「ミリャ、君さ」

ミリャの背中に、司が声をかける。

「……」

振り返ったミリャの視線を、司がまっすぐ見つめ返す。

「もしかして、君……もう喋れるんじゃない？」

潮風に吹かれた桜の花びらが、二人の間で舞い上がった。

ひらひらと舞い降りてきた花弁が、二人の視線の中央でゆっくり落ちていく。

「……」

ミリャの口元に微笑みが浮かんだ。

「……どうしてわかったの？」

司は口を半開きにさせたまま目を丸くした。

「……」

ミリャが体ごと司に向き直る。

「あれ、確信では、なかったのかな」

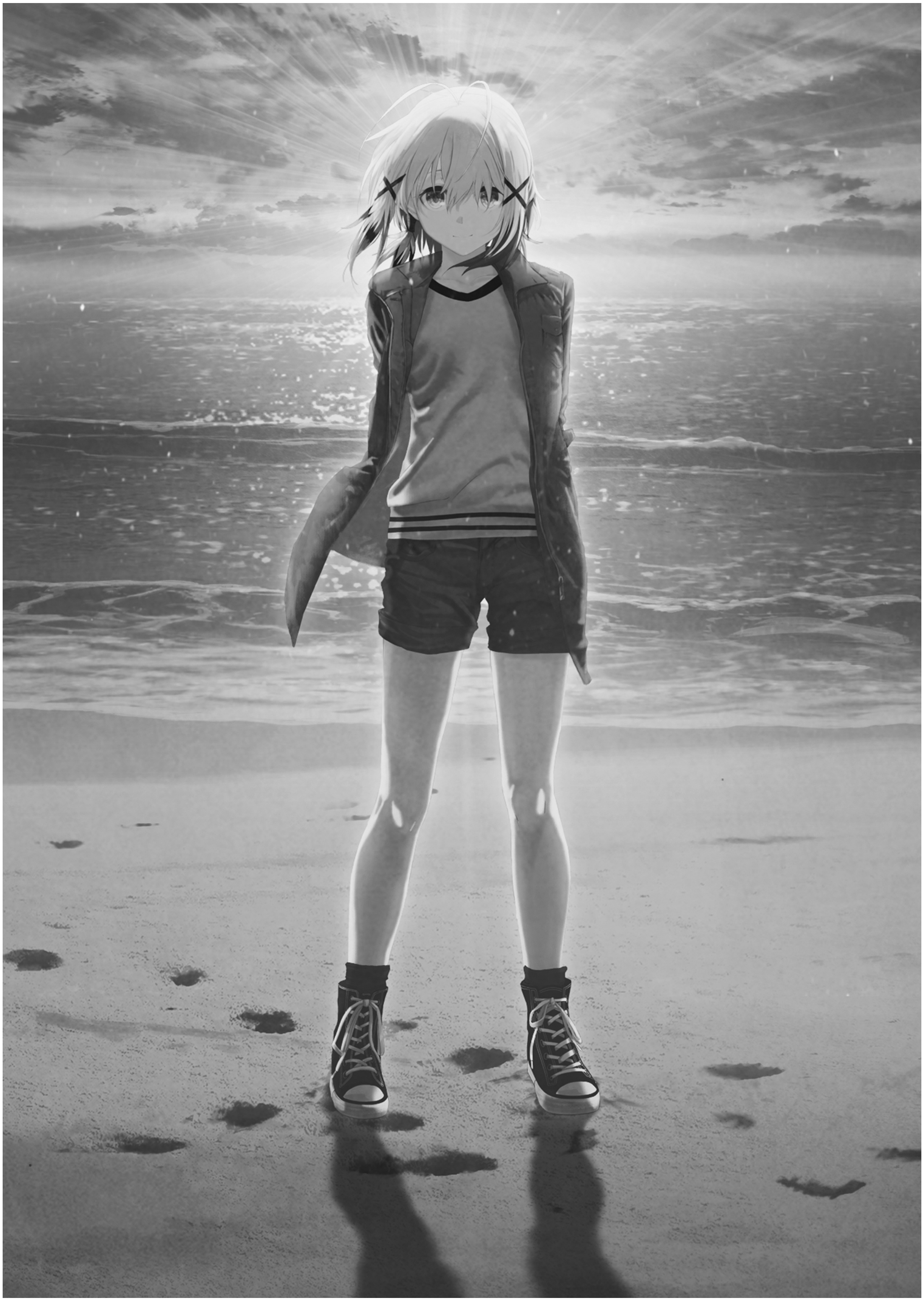
くすりと、ミリャが小さく笑う。

「まぁ、いっか」

両腕を後ろに回し、前屈みになって司の顔を覗きこむ。

「こうやって話すのは、二度目になるのかな

こうやって話すのに、二度目になるのかな」
瞬きも忘れている司に、ミリャが微笑みかける。
「改めまして、ミリャ・B・ホラトリアこと――。三国紗希です。よろしくね、司くん」



TrymenT
—今を変えたいと願うあなたへ—
III

2020年6月27日 発行

脚色
えある

原作
TrymenT

カバーイラスト
雫将維・クロノミツキ

本文イラスト
雫将維・クロノミツキ・mocha

カバーデザイン
shotaro ichinose

公式サイト
re-tryment.com

公式Twitter
@TrymenT_PJ

発行
TrymenT

本書の無断複製、無断転載、無断アップロードを固く禁じます。

©TrymenT AlL RightS ReserveD.

TrymenT

目次

登場人物名簿
OnE SideD LovE
禁断の果実